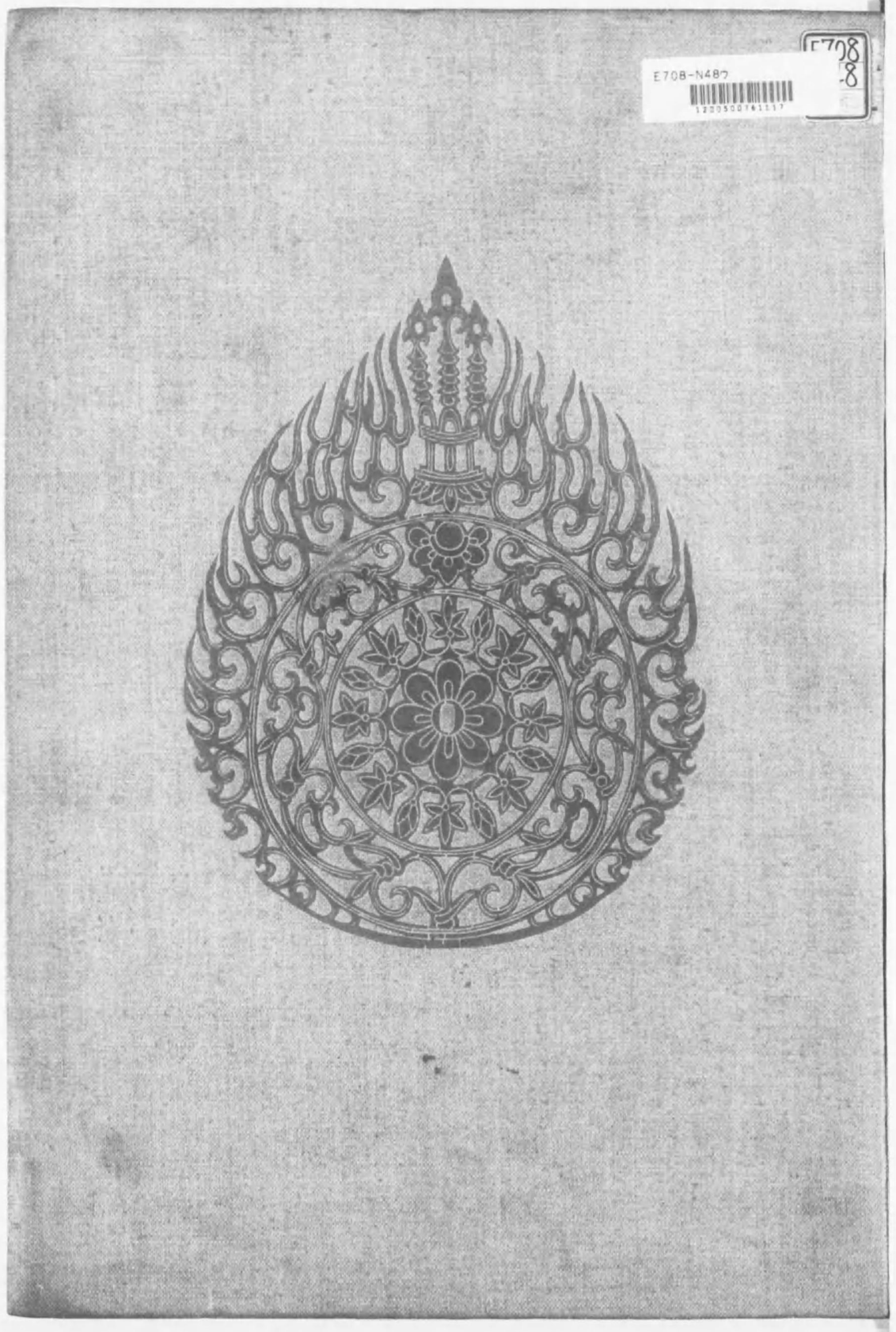


E708-N487
1220500761117
E708
8

始

西大寺大鏡　第一

E708
N48
(23)

南都十大寺大鏡
第二十三輯

西大寺大鏡第一册目次

解説

西大寺

圖版 一 東門
同 二 金堂
同 三 同 釋迦如來像（正面）
同 四 同 同 （左正斜面）
同 五 同 同 （右側面）
同 六 同 彌勒菩薩像（正面）
同 七 同 文殊菩薩像（正面全形）
同 八 同 同 叅屬佛陀婆利三藏像（正面）
同 九 同 同 最勝老人像（正面）
同 一〇 四王堂 十一面觀音菩薩像（正面）
同 一一 同 四天王 持國天及多聞天像（正面）
同 一二 同 多聞天像夜叉
圖版 一三 四王堂 四天王 增長天及廣目天像（正面）
同 一四 同 同 增長天像（頭部）
同 一五 同 同 夜叉（全形）
同 一六 同 同 同 （頭部）
同 一七 同 廣目天像夜叉（頭部）
同 一八 同 吉祥天像（正面）
同 一九 同 同 （右正斜面）
同 二〇 同 四佛像 阿閦如來像（全形）
同 二一 同 同 釋迦如來像（正面）
同 二二 同 同 寶生如來像（同 ）
同 二三 同 同 同 （頭部）
同 二四 同 同 阿彌陀如來像（正面）
同 二五 愛染堂 愛染明王像（全形）
同 二六 行基菩薩像（正面）
同 二七 興正菩薩像（正面）
同 二八 舍利塔（全形）
同 二九 同 星蓋
同 三〇 同 周圍腰透彫

圖版　三一　舍利塔周圍腰透彫
同　三二　同　同
同　三三　五瓶舍利塔（瓶二口）
同　三四　同　（大形）
同　三五　同　（小形）
同　三六　寶塔（全形）
同　三七　舍利塔（伊勢舍利）
同　三八　同　（鈔封舍利）
同　三九　寶塔（壓舍利塔）
同　四〇　佛具（鈴・獨鈷・三鈷・五鈷・懸）
同　四一　塵尼・太刀・刀子・信印
同　四二　金光明最勝王經（卷第一序品）
同　四三　同　（卷第十奥書）
同　四四　經筥（全形）
同　四五　同　（內部）
同　四六　不空羂索神呪心經（卷尾）
同　四七　西大寺資財流記帳（卷首）
同　四八　同　（卷尾）
圖版　四九　西大寺草創伽藍繪圖
同　五〇　西大寺中古伽藍圖
同　五一　西大寺三寶料田畠目錄（卷首）
同　五二　同　（卷尾）
同　五三　西大寺班田圖
同　五四　西大寺文書　嘉元元年大政官牒（卷卷）
同　五五　同　同　（卷尾）
同　五六　同　建長元年官宣旨
同　五七　同　後醍醐天皇綸旨
同　五八　結夏表白（卷首）
同　五九　同　（卷尾）
同　六〇　八幡神社本殿

海龍王寺

圖版　六一　勅額
同　六二　東門（全形）
同　六三　同　（內部部分）
同　六四　本堂（全形）
圖版　六五　西金堂（全形）
同　六六　同　（左側）
同　六七　同　（內部構築）
同　六八　講堂（全形）
同　六九　同　（內部構築）
同　七〇　五重塔婆（全形）
同　七一　舍利塔（全形）

不退寺

圖版　七二　南門（全形）
同　七三　同　（內部部分）
同　七四　本堂（全形）
同　七五　聖觀音像（全形）
同　七六　五大明王　不動明王像（正面）
同　七七　同　降三世明王像（同）
同　七八　同　大威德明王像（同）
同　七九　同　金剛夜叉明王像（同）
同　八〇　同　軍荼利明王像（同）
圖版　八一　多寶塔（全形）
同　八二　同　（軒廻組物）
同　八三　同　（內部天井）

額安寺

圖版　八四　虛空藏菩薩像（正面）
同　八五　文殊菩薩騎獅像（全形）
同　八六　熊凝精舍班田圖

寶山寺

圖版　八七　彌勒菩薩像（全圖）
同　八八　同　（前部）
同　八九　同　（部分）
同　九〇　同　（同）

南都十大寺大鏡
第二十三輯

西大寺大鏡第一册解説

西大寺

天平寶字八年九月十一日太上孝謙天皇は金銅七尺の四天王像を敬造し、兼ねて一寺建立の御誓願があり、同年十月九日天皇御重祚後墾天平神護元年この像は鑄出され、地を平城右京一條三四坊に相して伽藍をこゝに起し、三論宗西大寺はこゝに創めて成つたのであつた。東は佐貴路（除東北角兼倩寮）南は一條南路、西は京極路、北は京極路（除山陵八町）を各限として、その居地三十一町、境内には次第金堂院、十一面堂院、四王堂院、小塔院、食堂院を主とし、西南及び東南角院、政所院、鳴院、正倉院、法院以下の數十院の堂塔がその甍を聳え軒を並べ、又西隆尼寺をその境内に屬せしめ、平城宮の勅願大寺として聖武天皇御建立の東大寺と東西相照らしてその壯觀を競ふ。屢々稱德天皇の行幸を仰ぎ、上下臣下の施捨奉獻の物多く、時代の信仰甚だ厚きものがあつたのであつた。併しながら、神護景雲四年八月四日稱德天皇崩御と共に皇位は六十年にして再び近江大津宮統に移り、轉て帝都北遷の後はその地は古京として遺され、忘れられて行き、又寺中に承和十三年、貞觀二年、延長五年、同六年等數度の火を起し、爲めにその堂塔佛像等次第に燼滅に歸した上に、本寺はたとひ勅願に成りながら、世異り時移り、又東大、興福兩寺のやうに王朝又は藤原氏不斷の保護に預るやうなこともなく、その寺勢衰退に任せ、爲に伽藍多く廢滅に委ねられ、舊觀漸くその影を地上から沒して行くのであつた。

併しながら時は期つ。本寺草創後ほゞ四百七十年を經て、嘉禎元年興正菩薩叡尊は本寺に來住し、眞言律宗を樹立し、その高潔の法德と堅忍の精神とを以て鋭意寺家の再興を企てるのに及んで本寺はこゝにその第二紀元に會したのであつた。卽ち菩薩は文永弘安の異國襲來の際には敵國降伏の祈禱に功を現はし、又殊に後嵯峨、後深草、龜山後宇多、伏見五朝の國師と仰がれて朝家の御信任を厚くし、爲めに本寺は或は勅命によつて全國國分寺を以て本寺末とせられ、莊田十數箇所を賜ひ、或は多く田園の施捨を享け、爲めに四王堂、光明眞言堂、五重塔、文殊堂等が建立せられて寺勢頓に揚つた。併し爾後二百餘年間時に興廢あり。或は文龜二年五月七日火あつて四王堂、塔、鐘樓、四面僧坊等を悉く灰燼に歸せしめ、或は天正年中その莊田を大和亞相秀長の爲に奪はれ、寺勢漸くに衰へつゝ行くのであつたが、慶長七年德川幕府は爲めに三百石を寄せ、また降つて元祿正德の頃寺勢三度興らうとする萌しがあつたけれども、その力に乏しく、爾後寺運復た振はずして現在に及ぶ。今寺域中僅かに金堂、觀音堂、四王堂、愛染堂、不動堂等を數へ得るのみ、南都訪古の遊子にして一度足を寺域に入れ、雨露に覆しむ堂塔の礎石を見れば本寺草創再興の盛時を想つて撫然長歎息するであらう。寺寶また消滅、散佚したもの多く、現狀は往時の十が一にも及ばないのであらうが、而も他に類を見ない靈像異色のある重寶を傳へて居るのは流石古都の名刹たる所

以である。

一　東　門

二　金　堂

西大寺中興の伽藍金堂院は最初東西兩五重塔藥師金堂彌勒金堂とから成つて居た。資財十一年の記錄である本寺資財流記帳によれば、その藥師金堂は中門一宇と軒廊一周とを具へ、單層長十五丈九尺廣五丈三尺で、その形式は甚だ珍らしく、屋蓋その他に種々の莊嚴を付けて居たので、『蓋上東西金銅香形各垂立、銅鳳形各咋銅鐸、蓋上中間金銅火炎一基、中在金銅蓮形、居銅蓮花形、合持於金銅師子形二頭、踏金銅雲形、又宇上周廻火炎肩六枚、並在銅瓦形、角隅瓦鑄銅華形八枚、桶鑄金堂華形、懸六枚各着鈴鐸等、又四角各懸鐸堂扉、並長押、在金銅鋪金脇等』と知られ、内には半丈六の藥師像の外十一面馬頭羂索諸觀音勢至、孔雀明王、座訶座由璃諸菩薩、梵釋四天王、羅漢等二十一軀の壇像、その他觀音像、薬師佛像及補陀落山淨土變及藥師淨土變各一鋪等を安んじ、又彌勒金堂は神護景雲三年六月十五日稱德天皇の勅命によつて建立せられた所で、前者の北に在つて、前に鐘樓鼓樓を具へ、重層、長廿丈六尺廣六丈八尺と言ひ、その形式は藥師金堂ほどの莊嚴はなかつたが、又諸處に銅金具を鋪裝して居たらしく、内に半丈六の彌勒菩薩を中心とし、脇侍以下十二軀の埏像及音聲菩薩、羅漢、神王、龍王等六十三軀の埏像によつて成る彌勒淨土變相を現はして居たのである。この金堂院は貞觀年中寺火の爲めに燒滅し、その後は再興のことなく、興正菩薩が本寺を再興した時になつて漸く復興せられたのであつたが、爾後又煙滅に歸した。さうして今の金堂は興正菩薩建立の光明眞言堂を續ぐものであるが、遙か後れた寶暦年間の建立に係り、中央に現本寺の本尊釋迦如來、その東側に彌勒菩薩、西側に文殊菩薩諸像を安置して居る。

三—五　金堂　本尊　釋迦如來像　正面　右側面　左正斜面

木造　素地　立像

像高　五尺五寸五分　光背高　七尺二寸二分

臺座高　一尺五寸五分

今本寺の本尊で本堂の正面に安置して居る。もと興正菩薩の建立したと言ふ光明眞言堂の本尊であつたが、その堂が滅んだので、その遺址に寶暦年間現在の金堂が建てられるのに及んでその本尊とせられたのである。像は見らるゝ如く優塡王第三傳の像として有然が永延元年宋から請來したかの清涼寺の釋迦像の摸造であつて、興正菩薩が嵯峨に參籠祈念して作つたものと言ふのである。清涼寺釋迦像は鎌倉時代に於いて甚だその信仰を聚め、それと共にその摸造を作ることが流行し、その遺例が諸地方に可成り廣い範圍に亙つて見出されるが、本寺のこの像も亦その一例なのである。その製作から見て所傳のやうに興正菩薩の時のものと信じることが出來るので、本冊第五十一、第五十二圖に掲げる本寺田園目錄中に建長四年新造釋迦云々とあるのが恐らく本像に當るものと解せられる。この頃に興正菩薩と相携へて戒律の宗の復興を企てた僧門の人々に清涼寺像が特に崇敬せられたらしく、菩薩の法德の薫染したかの鎌倉極樂寺、金澤稱名寺、或は大悲菩薩再興の唐招提寺にまたこの種のものが遺存して居るのが注意せられる。それ等の内で本寺のこの像は、菩薩がこの宗教運動の主たるものであつたやうに、それ等の像中わけても尊い安に拜せられる。

像は檜材を用ゐ、寄木造、清涼寺像のやうに素地のまゝで、袈衣には處々に截金の蓮唐草の圓紋を散らし、且つその襞文の稜に沿つて截金線を置いて居る。これを原像に比べるとその形容はかの異國的な格調から漸く遠ざかり、餘程國風化し、優しみのあるものとなり、且その製作に於いてはこの時代の寫生的の手法が加はつて現實味を帶びたものとなつて居るのが目を引く。而もなほ一見して原像を髣髴せしめるだけの忠實さを備へて居る。さうしてその技はこの種の摸像中で一段の優秀を示すもので、形態も寛に整美し、且部分的に精細な刀の働きがあり、摸作とは言ひながら清新の氣を含み、確かにこの時代の優作としても挙げることが出來る。光背及び臺座また像と同時のもので、殊に光背の透彫に於ける克明な彫技は推賞に値する。

六　金堂　彌勒菩薩像　正面

木造　漆箔　坐像

像高　九尺四寸七分

寄木造、漆箔、玉眼嵌入。前掲の釋迦像の東脇に安置してある。もと本寺講堂の本尊であつたもので、本寺中興第二世慈嶺和尚の造立する所と傳へる。その製作から見てこの寺傳はほゞ信じられる。眉目甚だ美しく、手足の指や腹部の肉取りにも苦心の迹があり、天衣、條帛袈裟に於ける襞文にはこの時代の堅實にして練達した彫法の妙がある。殊にその裳の膝邊の一本彫に現れるものに似た陰い太い襞は、像にその巨軀に適はしい力强い表現を與へて居る。像の寶冠並に天冠の纓の上部は後補である。

七—九　金堂　文殊菩薩及脇侍像　正面全形　佛陀波利三藏正面　最勝老人正面

木造　文殊　紗帽　坐像　其他著色　立像

像高　文殊　二尺七寸五分　獅子共　一丈一寸九分

三藏　三尺四寸五分　老人　三尺五寸五分

優塡王　三尺八寸五分　善財童子　二尺九寸

もと文殊堂の本尊であつたと傳へられ、今は金堂本尊釋迦像の西脇卽ち前掲彌勒菩薩像と本尊釋迦を東西に挾んで安置せられて居る。各軀寄木造、玉眼。文殊菩薩は肉色金泥塗、著衣には金泥地に彩色あり、その他は總て彩色像である。文殊は童子形に現はされ、獅子に騎り四脇屬を從へた群像で、渡海文殊と謂はれ、鎌倉時代以降彫刻にも繪畫にも屢々現はされたもので、各像皆同作なるべく、それ等は相貌にも衣襞にも或は獅子の肢體にも鎌倉時代の作風を示すが、その肉身を現はすのにやゝ生氣を缺き、衣文を作るのに寫實を追ひ過ぎて反つて形式化の弊に陷つて居るところからすれば製作時代はその時代の中期以降と思はれる。遠莫この種の群像で知名である安倍文殊像、丹後切戸文殊像と並び稱すべき製作である。

一〇　四王堂　本尊　十一面觀音菩薩像　正面

木造　漆箔　立像
像高　一丈八尺

本寺金堂の東方に在る四王堂又云十一面堂或觀音堂の中央厨子中に安置してある。本寺草創の際に建てられた十一面堂は高一丈一尺の十一面觀音立像を安置して居たのであつたが、早く滅んで以後その跡を絶ち、中世に及んで本像が四王堂に置かれたので、昔時別當の二堂は一堂となつたことゝなるのである。本像は鳥羽院の御願によつて建立せられたもので、洛中十一面堂と呼ぶに安置せられて居たのであつたが、鳥山上皇の御勅願によつて正應元年十一月九日當寺の四王院に移坐せられ、庄園田地の御施入もあつて崇拜の厚いものがあつたのであると傳へる。

今像を見るのに寄木造漆箔後世の補修で原容が失はれて居るやうに思ふ點もあるが、大體藤原末期の樣式を現はし、その面貌や衣裳の皺文に優麗な趣致が見られる。さうして全體の形も整ひ纒りがよく、その巨像であることを思ふにつけて作者の技術の程を稱へしめる。莊嚴持物、光背等は遙か後世の補作に成る。

四王堂　本尊　四天王像

立像

持國　增長　廣目　銅造　多聞　木造　夜叉　各銅造

一一　持國天像　正面

像高　七尺二寸三分　全高　九尺五分

一二、一二　多聞天像　正面　夜叉

像高　七尺三分　全高　八尺八寸五分

一三—一六　增長天像　正面　頭部　夜叉全形　同頭部

像高　七尺八寸五分　全高　九尺六寸

一三、一七　廣目天像　正面　夜叉部分

像高　七尺二寸九分　全高　九尺一寸一分

天平寶字八年九月十一日孝謙上皇は金銅七尺の四天王像を敬造し兼ねて一寺建立の御誓願あり。翌天平神護元年に上皇が御重祚あらせらるゝや、異賊の防禦に擬してこの像を鑄冶せしめ給ひ、以て伽藍を御創立あらせらる。是が卽ち本寺の草創であつて、この四天王像は四王堂に安置し奉つた。傳へる所によれば、この四像の鑄造に當つてその内の一體は功七度に至つてもなほ成らなかつた爲めに、天皇は更に身をもつて御立願あらせられてその志を遂げられたと謂ふ。このやうに本寺の草創に深い因緣を有つこの靈像も亦四王堂も承和以後數度の回祿に遇つて幾度か變遷を閲して來て居る。卽ち四王堂の當初のものは風く灰燼に歸して了つたのを、鎌倉期興正菩薩の本寺中興に際して諸伽藍と共に復興せられたが、この堂も文龜二年五月七日兵燹に禍せられてまたその迹を絶ち、今日の四王堂は遙か降つて延德二又云正德元年建立のものに係る。さうして四王堂のこの變遷に伴つて四天王像も亦轉變の歷史を閲するので、貞觀二年の本寺災上の際には四軀の内多聞天像一軀と四王各の夜叉とのみを遺存し、その餘の三軀は皆銷燼し、よつてまた補作鑄造せられたが、それは文龜二年の災火には貞觀後再興の持國增長、廣目三王像は破損を免かれたが、前の火に災を蒙りながら殘つた右多聞天像がたゞ僅かにその左脚一部と夜叉とを殘すのみで破壞して了つたのである。但しこの際も最初の夜叉は總て遺存したのであつた。こゝで多聞天像が木造で補作せられ今日に及んで居るのである。

さて像は持國、增長、廣目三王は等しく銅像であつて、今皆殆んど素地を露はすが、增長天の面部等に多少鍍金の痕迹が窺ひ得られる。これ等の像はその服飾に手法に共に平安初期の右調を存し、貞觀年中回祿の後を距ること多くない時代に鑄造せられたものであらう。四天王像のやうな肢體を活躍きせ姿態に變化のあるものは鑄造には甚しい苦心を要し、勅願の御造像に際してその内の一體は數度改鑄して漸やくに成つたと言ふのも、或は又他には四天王の鑄造せられた例が殆んど見當らないのも、孰れもこの間の消息を語るもので、かくてこの四天王像は彫刻史上甚だ注意すべき遺品といふべきである。なほ持國天の冑やその指頭、增長天の右袖先、その他各像の持物等は木造の補作である。

多聞天像はその左脚下方と夜叉とが銅造であつてその餘は木造である。左脚は夜叉と同樣の燒痕を存して居り、その製作に於いて夜叉と時代を同じうし、貞觀年次火中しながら遺存したもの、卽ち謂はゞ當初の像身の名殘である。佛體は文龜二年罹災の後の補作の際に恐らく持國天像を摸して形つたものであらう。

最後に四天王の足下に蹲踞する夜叉は何れも銅造である。たゞ持國天のものゝ右脚、增長天のものゝ左脚などは木造の補作である。四體はその像面に燒痕歷々として存して居るが、その裡に奈良朝の雄大な作風を示して居る。

斯くの如く四天王像が、今日に及ぶ本寺の有爲轉變の歷史の中に於いて、少くない變遷を閲しながら、よく今にその遺構を存するのを觀る時、本寺本願の靈像を如何にかして保存に努めて來た人々の志のほどに就いて深く感歎すると共に、我々はそこに本寺の興廢を表示するものがあるかに考へられ、感慨更に强きものがある。

一八、一九　四王堂　吉祥天像　正面　右正斜面

木心乾漆　著色　立像
像高　五尺七寸

本像は今四王堂に四王像に列んで置かれて居る。資龜十一年の本寺資財帳にはこの像に當ると推せられるものが見出されない。製作は天平樣式であるが、平安朝初期の作風をも示して居る。卽ち製作は平安朝初であるが奈良の地のものだけに古式に作られたのであらう。さうして奈良朝末から盛んになつた吉祥天の崇拜の氣運のまゝに作られたもので、前記の四王像に於いて見ても亦本寺資財帳に於いて見ても、金光明最勝王經の信仰による造像の特に多い本寺であることを思ふにつけ本像の造立せられたことは尤のことである。

さて本像の美しさは多くその彩色にあつたのであらうが、今それが剝落して居るのでこれを觀賞し得ないのを憾むけれど、その殘々

愛すべき姿になか〳〵に艶美なりし舊時を偲ばしめるものがある。製作の上では本像の木心は除り大きくない木片を寄せ合せて居るものでその寄せるのに極く自由に或は勝手な部合によつてやつて居るのが注意せられる。そこに一木造の意味が全くなくと言つて後の寄木造のやうに秩序だつたものでないところに所謂木心乾漆像の本體が存するかに考へられるであらう。

持物寶珠は木製〔後補〕である。髻先は後世の補作に係る。その肉身の著色は後補のものであるが、他は剝落の甚しいうちに原の著色と文樣とを遺して居る。光背臺座は共に舊物を遺存して居ない。

四　佛像

木造　漆箔　坐像

二〇　阿閦如來像　正面〔臺座共〕

像高二尺三寸五分

二一　釋迦如來像　正面

像高二尺二寸八分

二二、二三　寶生如來像　正面　頭部

像高二尺四寸九分

二四　阿彌陀如來像　正面

像高二尺四寸九分

もと本寺の塔婆不現在内に安置せられて居たものと傳へる。四佛であるので如何にもさうらしくたゞ本寺の塔婆は寶龜十一年の資財帳によると金堂院に二基建立せられて居たのであるが、本像はこの塔のものであるか否か明らかでない。各軀木彫漆箔臺座も總べて漆箔を押す。臺座は孰れも後補を多く混へて居る。

像は四軀ともその大きさと言ひ、製作と言ひ相似し、正しく一具のものと考へられる。その樣式は大體は天平時代のものと言ふべく、かの唐招提寺金堂本尊盧舎那佛像などに俱通ふ所があるが、また自から異つて、平安初期の木彫の手法をも示し、かの廣隆寺講堂本尊阿彌陀如來像などにも似て居て、製作は平安初期に屬するものと解せられる。四軀孰れも眼が吠上つて面貌の表情に强味があり、衣襞はその彎曲も彫りも力强く、そこに平安朝初の手法が見られるのである。さうして製作技巧に就いては四軀一具に作られるべきためでもあるが、類型的な手法が面貌に於いても或は尤も著しくは膝の邊りの衣文などに現はれて居る。たゞ衣襞の彫技に就いては細技を用ゐず簡にして要を得たところに賞すべきものがある。さうして四佛道品中恐らく最右のものとして珍重に値する。尙この現在寺傳による名稱には一考すべき點があるが、遽かにこれを定め難いので暫しこのまゝにして置く。

二五　愛染堂　本尊　愛染明王像　正面

木造　著色　坐像

像高　一尺四分

本寺中興興正菩薩一代榮譽の勤行は文永弘安の異賊降伏の祈禱であつた。文永元年元冠が壹岐對馬に到ると、七月八日大將軍中務卿宗尊親王はその防難の爲めに御發向あらせられ、又龜山天皇は八月六、七、八三日間に亙つて異賊降伏祈禱の爲め四天王寺並に敎興寺に行幸あり、西大寺には特に勅使下向の御令旨があつたので、叡尊は百座仁王大會の導師となつて、敵國下降の修法を勤めたが、同月廿八日敵國の大船百餘艘大破のことゝなつて、こゝに上人は至上の面目を施こしたのであつた。又弘安四年元國が再度大舉して來襲した時にも、又勅旨を奉じて同年七月廿九日敎興寺講堂千手千眼の寶前で百座仁王大會の導師を勤め、又同月晦日には男山八幡宮に參籠し、翌閏七月一日から毎日二時八百座の仁王講と毎夜七壇護摩法とを勤行した。この時叡尊は愛染明王尊勝法を掌つたのであつて、今本寺愛染堂に本尊として安置せられて居る愛染明王像が、卽ちその時の本尊であつたものと傳へて居る。こゝに揭げたものが卽ちそれで、この法七箇日結願の夜には明王所持の鏑矢が空中に妙音を發し西を指して飛び、墜て敵國敗散のことゝなつたと傳へて居り、この故にこの像の持つ矢は特に鏑矢となつて居るのである。卽ちこれ菩薩在世の時以降尊崇たゞならぬもので、七大寺巡禮記西室の條に「在愛染像二尺許在口傳也」とあるのが卽ちこの像に當るものであらう。その製作を見るのに肉身や衣襞によく鎌倉期の手法を示し又形態も整ひ、當代の樣式に從ふものであり、當代の愛染明王像の一典型たるものである。さうして僅か一尺前後の小作であるのになか〳〵に大きな姿をもつて居るのも賞せられる。

二六　行基菩薩像　正面

木造　著色　坐像

像高　二尺二寸

本像は寄木造、玉眼嵌入のもので、鎌倉時代の製作である。唐招提寺に行基菩薩像として傳へるものと相貌相近く、製作は彼に一籌を輸すかに考へられるが本像は彼に比してその手法の簡素な點に於いてまた特色をなして居る。

二七　興正菩薩像　正面

木造　著色　坐像

像高　二尺九寸五分

本寺の再興開山興正菩薩の像である。菩薩はその名を叡尊と言ひ、思圓と字し、建仁元年大和國箕田郷に生れ、夙く相好具足す。八歲の時出家し、歲十七にして東大寺に於いて剃髮染衣、後醍醐寺に入り、叡賢に就いて眞言乘を學び、十八因明、九會金剛等の學業を習受し、廿四歲の時高野山に敎相法門を、醍醐山に胎藏次第を傳行し、翌年東大寺道場に護摩を修し、次で靈山院に印可を受け、又具足灌頂を終へ、卅一歲開居の地を卜して法華誦の業に入つたと傳へる。

叡尊はその法資豐滿、ことに精進堅固の氣强く、平安朝中期以降僧門漸く戒律把持の氣風に乏しく、紀綱やゝ頹廢に傾むいた反動として、平安朝末から鎌倉時代初期へかけて起つた律宗再興の思潮に乘つて、唐招提寺大悲菩薩覺盛と相携へ、また東大寺凝然、泉涌寺俊芿と呼應して律宗興隆のことに力め、又よくその功を成し、自らは嘉禎元年卅五歲の春西大寺に入り、翌年東大寺羂索堂に於いて近事勤策、大菩薩の大乘三聚の戒行を自誓受得し、これを醍醐寺叡賢から得た眞

言乗に合せてこゝに新たに眞言律宗を樹て、建長元年招提寺壁盛寂滅の後は、その我が國律宗の根本寺をも管して、專心戒律宣傳のことに力めたのであつた。この爲めに三論宗草創の本寺は只後眞言律宗の總本山として現代に至るまでその法燈を掲げて居るのである。

叡尊は又本寺再興の志をもつて殷意その任に當り、その法德高邁にして或は五帝御敎導の國師となり、四輩惣仰の薩埵となり、又衆生濟度の生身佛となつて、上下の尊崇を併せ、多く喜捨施入の資財を得てよくその業を成したのである。この故に寺家師をもつて中興上人と敬して居る。正應三年八月廿五日歳九十、法齡五十四を以つて寂す。正安二年七月四日伏見院宣下同閏七月三日後伏見帝綸旨下つて興正菩薩の諡號を賜ふ。

こゝに掲げた興正菩薩像はもと菩薩居住の本坊であつた西室に置かれて居たので、南都七大寺巡禮記本寺西室條に『安菩薩像』とするものは本像を指すものであらう。その眦上がり、眉毛長く、鼻大きく、口よく締る面貌その偉大な骨格、孰れもよく菩薩の雄邁な氣格を提へたるかを思はしめ、本像はその菩薩在世或はそれを除り距らない日に成つたものであることを思はしめる。技巧上では納衣を除り整頓しない、さうして甚だ數多くの衣文で現はし、その寫實味をもつて相貌の寫實に呼應せしめた意圖に興味深く感せしめるものがある。

二八—三二一　舍　利　塔　全形　屋蓋　周圍腰透彫　同　同

銅造　鍍金

全高　一尺二寸二分　屋蓋高　一寸三分　同幅　六寸
七分　胴高　六寸　徑　六寸　覆高　一寸四分五厘

寺傳によれば內部の瓶中には興正菩薩感得の舍利を藏めて居ると言ふ。その製作から正しく菩薩在世の時のものである。舍利塔とは言へ寧ろ燈籠のやうな構へで甚だ珍稀である。その工は極だ精であつて、この點に於いては舍利塔遺品中——恐らく鎌倉期製作の金工品中と言つてもよろしいであらう——實に群を拔いて居る。全體の結構もさることながら、その圓周腰廻りの龍贔、牡丹、菊花、蓮花、雲龍等の文樣の透彫や屋蓋上面の雲龍、蓮花蔓艸文樣の浮彫や頂上の寶珠火焔幷蓮座の鏤刻に殊にその程が知られるであらう。たゞその工の專心精なるに力めて强さに缺けて居るのは、同じ鎌倉期としても除り早くない頃の製作として又止むを得ないところである。而もこの頃を過ぎると陷つて行くやうな末節の技を衒ふ類には墮して居ないので、本品の如きは我國此種金工史上掉尾の力作である。

二三二—二三五　五瓶舍利塔　五基　瓶（口　舍利塔（大形）一基　同（小形）一基

銅造　鍍金

全高　大形分　八寸三分　小形分　七寸五分

二三六　寶　塔　全形

鐵造

全高　五尺八寸

この舍利塔は五基で一具をなすもので、五基は形態全く同樣、たゞその大きさは大二（第三十四圖）、小四（第三十五圖）はその內の二に分れ、小四は同大である。さうしてこれ等は各第三十三圖に示した瓶中に容れられ、さうして第三十六圖に現はした鐵造寶塔の內に並置されるのである。さうしてこの多寶塔の擦に、大願主西大寺沙門叡尊始自弘安六年癸未十二月一日至于同七年甲申八月七日造畢（日數六十六日）大工藤原宗安との銘があるのによつてその製作に關する大要が知られる。七大寺巡禮記本寺西室「興正菩薩自坊」の條に、在『五尺鐵塔安舍利入五瓶也此舍利者菩薩自十方相傳之舍利云々』とあるのはこの塔に就いて言ふものと考へられる。又西大寺田園目錄（本冊第五十一、第五十二圖）中に弘安十一年、正應元年、永仁元年、同六年等に、爲西室御持佛堂鐵塔等として田園が施入せられて居るのを見るが、これ亦この鐵塔を指すのであらう。

さて五基の舍利塔は俱に銅造で、これに鍍金が施されて居る。本冊中前に掲げ後に載せるこの種の舍利塔中結構は最も簡であるが、その形姿莊重にして引き締り、作技最も冴え、鎌倉期の極達した工藝の精とも言ふべく、例へばその火焔に於ける如きこれを題著にして居る。第冊三圖に現はした瓶子はこの舍利塔を容れるもので、五箇あり、銅製にして上部の蓮花及飾紐を五行の色に變へてこれを區別して居る。卽ち大型のものは蓮花を銀色、紐を白色に、小型のものは蓮花を四分一色、青を表はす「金色、黃を」、赤銅色、赤を」、銅色、黑を」に、紐を青、黃、赤、黑にして居る。さうして五基は大を中に四方に配せられたのであらう。

鐵寶塔は同じく本寺所藏の文永七年鑄造の銅塗塔本冊第三十九圖と較べるとその材と大きさとに相異はあるが、形式製作共甚だ近く、或はこれはかれに則つて造つたものであらうかとも思はれる。併せてこの時代のこの種の金工中製作上からも、亦その年代の明らかな點に於いても注意すべきものである。なほその扉の鎖錠は五輪塔を形り、その下に人物像や蟬、兜蟲の形を著け、珍奇な工技を示して居る。

三七　舍　利　塔（伊勢舍利）　全形

銅製　鍍金

全高　一尺四寸九分

三八　舍　利　塔（勅封舍利）　全形

銅製　鍍金

全高　一尺八寸五分

第三十七圖の數層の蓮華座上のものは伊勢舍利と呼ばれ、興正菩薩が弘安六年伊勢太神宮に參籠祈願した時感得したものと言ひ、第三十八圖の五鈷杵上のものは舍利を紙片で包みそれを絲絲で括つてあるのは鹽山天皇の御勅封によるものと傳へられて居る。前者はその莊嚴が甚だ類多且精緻に作られ、その龜太鼓の緣を見るやうな玉緣、火焔付の緣に於いてもさることながら、蓮花、敷茵子、花盤、反花、柩座等の層々は專ら佛像の臺座の式を採り、而も佛座に於いてもこれほどの細緻なものは除り他に例がなかるべく、その技巧に於いては五瓶舍利塔に一籌を輸すかにも思はれるが、また鎌倉期工藝の特長を顯示するものと言ふべきである。次に後者勅封のものはその

三味耶形のやうに結杵を重ねたところに密具らしい意味を知り得るが、工技は雄勁にして五瓶舎利塔と近似し、併せて當代の小工藝品の代表的秀作である。

三九　寶　塔（壇舎利塔）全形

銅製　鍍金
全高　三尺

この寶塔は前掲の鐵寶塔と同形で中に銅製舎利塔を納めて居る。寶塔にはその方形壇の裏面に左の銘がある。

舎利之流布當時雖盛京承之明曇古今尤稀而去年秋不圖或得招提寺舎利壹粒相傳之由來信仰無貳機緣之純熟感欽且千余只逮逮相續復相承奇瑞之舎利爾參粒或傳從靈寺之寶壺或出從名山之神池無上之法寶待時而自集興隆之祥兆寧可不崇哉因茲冶鑄參尺金銅寶塔一基奉納此佛舎利所安置西大寺塔院也永爲一寺之靈寶將傳萬代之後葉而已

文永七年歲次庚午六月一日己巳鬼宿金曜

本願主西大寺衆首沙門叡尊

慶　印

行事比丘　實　海

琛　尊

銅細工　未長入道成佛

坂　上　友　末

鑄物師　友吉入道西珍

卽ちこれによつてその製作に就いての委細が明らかとなる。前掲鐵寶塔より少し早く作られたので、その形式の酷似するのも尤なところである。製作年記のあるのにつけ彼と併せてこれを直ちに鎌倉中期のこの種工藝品の樣式規準とするも可、引いてはこれを當代の建築樣式の年代標準となすも可であらう。

四〇　佛　具　鈴五鈷鐃鈷盤　三鈷　二具

銅製　鍍金
鈴　其一（向右）高　六寸二分　其二（向左）高　五寸八分

向つて右一具は金銅左一具は響銅製である。孰れも再興上人所用のものと傳へ、殊に後者は上人が弘安四年男山八幡宮に參籠祈禱した時の所用と言ひ、その鈴は鈴蟲との銘がある。共に所傳の頃の製作なるべく、兩者製作相似して居る。各四器具足して居るのが尊い。

四一　塵　尾

柄全長　七寸八分

太　刀

反長　三尺一寸鞘　柄長　七寸八分

刀　子

刀長（柄共）五寸四分五厘　鞘長　四寸七分

信　印

塵尾は棕櫚毛を用ゐ、柄には黑漆と白漆とを塗り分けて居る。但し毛はその本の方に殘存するのみで先は殆ど消耗して居る。本寺開基常願律師の所用と傳へる。恐らくその頃のものであらう。塵尾はもと拂子と同じく僧侶が安座の際などに昆蟲を打ち拂ふ爲めに用ゐられたものであるが、共に後には實用から轉じて裝飾の具とせられ、講經の折など法具となつたので、本邦でも右く聖德太子が勝鬘經御講讃の時にこれを執つて師子座に登られたと言ふ。上世の遺物ではこの太子御所用のものが天平寶字五年の法隆寺東院資財帳に墨尾壹枚深紫端紫紐紫邦右上宮聖德法皇御持物者として傳へられ、今御物となつて居る。又正倉院に三柄があるがその外にはこの西大寺のものを數へるに過ぎない。さうしてそれ等四柄は長い柄をもつて毛を挾み團扇樣に作られて居るが本寺のものはそれと異つて謂はゞ箒狀である。柄は木造であるが竹幹に擬して居るのは前記資財帳に奥竹形と謂ふのと合つて居る。

太刀は柄の金具が總て銅製鍍金で處々に莊嚴せられて居た寶石は今逸失して座のみが殘つて居る。刀身は錆び精は現存しない。金具の形式古式ながら工技鈍く、又寶相華文樣など弱く藤原時代或はそれよりやゝ下つた頃の倣古の作となすべきであらう。

刀子は精及び柄は象牙で作られ、金具は鍍金せられて居る。奈良朝のものであらう。

印は銅製火中したので印面毀損、鵞頭紐も缺失して居る。奈良朝の官印で法隆寺の同物今御物と共に珍重すべきものである。

四二、四三　金光明最勝王經　卷第一首（序品）　卷第十奥書

黃紙　墨書

四四、四五　經　筥　全形　內部

墨　八寸九分
蓋高　四寸五分　竪　一尺七寸　横　六寸七分

この金光明最勝王經は十卷を完存して居る。奥に永長二年三月六日辰時點了とあり、胡粉と朱墨で校點を加へて居る。每卷の奥書によつて明らかなやうに、本經は天平寶字六年二月八日百濟豐虫が二親菩提の奉爲めに法華、金剛般若、理趣般若、本願藥師諸經と共に敬寫し、更に聖朝の福壽を祈つたもので、卽ち出來たのは本寺の草創よりは古いのである。併し本寺への傳來は知られない。表紙の料紙は淺茶色で原時のもの、軸も赤天平式の木製撥形で、密陀繪で花紋が現はしてある。金光明最勝王經は天平時代に流行讀誦せられたものであるが、本寺のこのものゝ如きは古裝を備へ且つ十卷完備して居るので珍重すべきものである。

經筥は印籠蓋、二重組で內外共黑漆で塗られ、蓋表には蓮臺に大きく圓相を、側面には四方共牡丹の折枝を、內面には蓋身共數羽の蝶を、孰れも蒔繪にして居る。製作は鎌倉末期であらう。

四六　不空羂索神呪心經　卷尾

紙本　墨書
高　八寸二分　長　二丈五分

本寺所藏古經中の一で、本寺草創の時からの傳本であるならば本寺資財帳に登記してあるものに當るものであらう。筆致甚だ美しい。奥に寛德二年南圓堂に於いて加點した由を記して居る。南圓

堂と言へば不空羂索觀音の靈場であるので、そこに於いて加點したといふのに一しほの興味がある。

四七、四八　西大寺資財流記帳　卷首 卷尾

紙本　墨書

本寺の緣起坊地、堂塔房舍、佛菩薩像その他經律論文書、佛具等の寺寶、寺領田園等を十四章四卷に分つて載せた資龜十一年十二月廿九日の記錄である。大安、法隆兩寺等の資財帳に次いでの古資財帳であるが、原本は遺存して居す、これは近世の寫本である。謄寫したのはその筆蹟が次に掲げる本寺伽藍繪圖中のものと同じやうに思はれるから、この圖の摸寫せられた元祿十一年に擬すべきか。

四九　西大寺草創伽藍繪圖

紙本　著色

この西大寺伽藍圖は見らるゝ如く圖中に元祿十一年に資龜十一年十二月廿九日の繪圖流記によつて摸寫した由が記してある。卽ち、資龜十一年に前掲資財帳と並んで繪圖流記なるものが作られて居たことゝなつて居るが、その原圖なるものは今存して居ない。中央の本寺境域内は資財流記中の堂塔房舍章と大體合致するが、その外には西隆尼寺、本願天皇御陵等をも併せ圖し、又後世の造營らしいものをも現はして居るかにも覺える。遙莫かの資財帳と併せ見て古西大寺の規模を尋ねるのに大に便となる。なほ嘉元の頃本寺と秋篠寺との間にその所領山地に就いての抗爭のあつた時、この伽藍圖の原本はその裁決に預つて力あり、本寺をしてよく勝訴せしめたのであつたと言ふ。

五〇　西大寺中古伽藍圖

紙本　著色

縱　三尺一寸　橫　三尺六寸

題して南都西大寺中古伽藍圖とある。卽ち興正菩薩が本寺を中興した時の樣を現さうとしたもので、その幅裏に、三光院春辨坊應需上司出羽守延寅摸寫同院什物者也　天保十二年仲夏良辰とある。これの原本は今傳つて居らず、その原本がどのやうにして出來たものかなどのことも不明であるが、相當に根據のあるものであつたとも想はれ、本寺のそのかみの摸樣を知る上に貴重な資料である。

五一、五二　西大寺三寶料田畠目錄　卷首 卷尾

紙本　墨書

この目錄は興正菩薩本寺再興の頃の本寺所領田畠を錄記したものである。再興上人が天福二年以降本寺に施捨せられ或は本寺に於いて買入れた田園を文永十一年正應元年の再度に亙つて注錄した所と、上人入滅の後永仁六年十二月五日比丘覺忍が爾後所寄のものを注錄したところとを併せて居る。紙背各紙の繼ぎ合せ目には上下二箇所に、卷の前半に於いては信空、さうしてその間に於いて一箇處だけ爲衡の署名がある。本寺中興の實利的な基をなすものゝ記錄であり、その記上するのに年次を追つて居るので、本寺再興の內面を知り、又その次第に興つて行く樣をも併せ見ることが出來る。再興のことを知る上に缺くべからざる記錄であり、興正菩薩の精進努力のほどをも裏知せしめる。

五三　西大寺班田圖

紙本　墨書

縱　二尺六寸二分　橫　四尺九寸

本寺の草創の頃に於ける班田圖である。嘉元年間本寺と秋篠寺との間に寺領境域に關する爭議のあつた際はこれが持ち出されて、これによつて本寺は爭議に黑白を決し勝利を占めたと言ふ。

西大寺文書

紙本　墨書

五四、五五　嘉元元年太政官牒　卷首 卷尾

縱　一尺一寸一分五厘　幅　一丈

五六　建長元年官宣旨

縱　一尺二寸一分　幅　三尺三寸

五七　後醍醐天皇綸旨

縱　一尺一寸　幅　三尺二寸

今こゝに本寺再興の頃から應永、永享の頃までの文書類、今二卷に裝丁の內から重要なもの二三を採つて掲げる。第一は前にも記したやうに本寺と秋篠寺との間に秋篠山又號戊亥山の千町に亙る土地の所領爭があり、訴訟となつた時、嘉元元年十一月二日太政官から西大寺に下つた牒文の寫本である。これによつて本寺の本願たる孝謙天皇の國印ある流記資財帳及官符文書類その他大治年中の宣旨、嘉元元年八月の院宣に照して右の土地の柴薪は西大秋篠兩寺に通用を得るが、その土地は西大寺領たるべしとの判決が下されたのである。その中に引用せられて居るこの年十月十三日の西大寺奏狀中には本寺の緣起等に就いて參考すべきことが多く存して居る。なほ卷末に右の公事始末を文殿で錄上したものゝ寫本を付して居る。

第二は建長元年の左辨官の宣旨である。卽ち陰陽道を掌る司天が前年卽寶治二年は除極に當るから何か時變がある可きであると奏上して居たが、果して洪水、月蝕、白虹貫日等の變異があり、又左近衛府、內膳星等に火が起り、建長の年に入つても閑院內裏炎上し、又京師に大火があつたので、この上又水旱の虞があつてはとて、南都京都その他諸國の寺家をして金光明最勝王經を延曆園城等寺をして大般若經を執れも七箇日に亙つて轉讀せしめ、以て異變を攘ひ、五穀の豐熟を祈らしめられたときの西大寺に賜はつた宣旨であつて、これは當時の寫本である。文面各行の文字が上から下るのに從つて小さくなつて居る官宣旨の形式である。

第三は前に度々記した秋篠山に關する文書、卽ち西大寺領戊亥山并谷々田畠を爾後西大寺律家の僧衆の嚴重な監督の下に置き、その末葉の專にすべからざる由の宣旨で、頂昭法印に仰せられ、木工頭藤原宗房から本寺再興第三世淨覺上人宣旨へ執達せられて居るのである。淨覺は興正菩薩から律を受け、慈眞上人に繼いで正和五年から正中二年の寂年まで本寺に住した人である。

五八、五九　結夏表白　卷首 卷尾

紙本　墨書

海龍王寺

海龍王寺は今奈良市法華寺町に在る。寺地が平城宮の傍に在つたので脇寺と、又その東北隅に當つて居ると言ふので隅寺(又は角寺)と稱せられて來て居る。

聖武天皇勅願の靈場、光明皇后御願の寺で、皇后御自刻と言ふ十一面觀音を本尊とする。始め皇后は藤原不比等の舊居を御施入あり、先考先妣の冥福を御祈願あらせられたのであつたが、天平三年更めて工を起して、次第に金堂、東西金堂、講堂、經藏、鐘樓三面僧坊、食堂等を造り寺域四至十二町と言ふ。先之靈龜二年僧玄昉が求法の爲め入唐するのに當つて、光明皇后は龍王にその海上平穩を御祈願あらせられ、天平七年玄昉が歸朝するのに及んで、その請來の佛像經論等はすべてここゝに置き、食封一百戸、田一百町等を御施入あらせられ、玄昉をしてここゝに住せしめたまふ。この因緣に依つて本寺は海龍王寺と呼ばれたのである。爾來、寺運時に興廢あり、永久三年興福寺別當智尊が本寺の爲めに藤原氏の庇護を仰いだことなどもあつたが、年所を閲するのに從つて漸く頽廢に赴いた。然るに西大寺叡尊及びその法弟である本寺無首戒惠上人は、寛仁の末から正應年中に及んで大いに伽藍を再興し、本寺を以て戒律結界の道場としたので、寺運遽かに興隆するに至つた。その後暫しこの勢運を保持したが、又時を經るのに及んで講堂その他の屋宇を失ひ、慶長の頃家康が一百石を寄せたこともあつたが、享保の頃には金堂、東西金堂、護摩堂、經藏を存するのみとなり、その後又東金堂、護摩堂を失ひ、現在は僅かに本堂、西金堂及び經藏が遺存するのみ、興正菩薩以來の關係を持し、西大寺が直接に管理して居る。

六一　勅　額

木造　鐵板張　二尺二寸三分　幅　一尺二寸二分

この寺號の額は傳へて聖武天皇の宸筆と言ふ。その書風大體奈良朝のものゝ如くに見えながら筆勢に力がなく、字畫が緩んで居り、又四字の列びもやゝ窮屈に見える。又これを奈良朝製作の東大寺西大門や唐招提寺の勅額と比較するのに、その文字の彫法は大體は同じながら、これでは字畫は相當肉を有ち、その廻りの彫り込みが緩やかであり、かれに於いてのやうに肉が緣の彫りで極く狹められて居り、その彫り込みが急で深いのと相違する。又書と畫との相交るところに彼に於けるやうに重なりを見せて居ない。又その緣板は文字板と殆んど一平面をして居て古式であるが、その緣の輕形は鎌倉のものに類して居る。緣内側の丸面取の枠は扉の幣軸の形を移したものとも思はれる。總じて言ふと、本寺中興の時に奈良朝のものが破損して居たので、それに倣つて復興したものであらう。

六二、六三　東　門

全形　内部部分　四脚門　屋根切妻造　本瓦葺

今本寺の南方正面は西、北各方と共に全く塞がれ、東方の路にのみ門を開いて居るので、この東門が惣門となつて居る。四脚門で、心柱は圓柱、側柱は大面取方柱、心柱々頭に冠木雛形の腕木とを組み、上に大斗を置き、虹梁、板蟇股をもつて棟を受けて鎌倉以降普通の形式のものである。妻飾りなど鎌倉時代のものに見るやうな雄健な趣がなく寧ろ纖細で、遲れて足利時代も末葉のものと思はれる。蟇股は肩の衝きに力がなく、その邊りから脚へ流れる線が急であるが張りがなく、兩脚の踏み張りにも鎌倉のものに見るやうな力がない。脚端の切口も鈍い。虹梁と大斗との間冠木中央の東の上及棟と蟇股との間にも天竺樣の刳形のある實肘木を入れて居るが、この部は鎌倉時代には肘木を用ゐず單に虹梁を一刳りしたばかりである。木鼻は檜樣はないが輪廓は鳥兜形で時代が下つて居る。懸魚は拜みのも桁隱しのも古いものを存して居る。かくて建立時代も優秀な四脚門の多く現れた頃よりは遙か下るものであるが、なほその頃の四脚門の代表的な遺例として破損が割合尠いだけに尊まれる。

六四　本　堂

全形　桁行五間　梁間四間　單層　屋根入母屋造　本瓦葺

本堂は東門を入ると右手に南面して立つて居る。建立時代不詳、樣式上江戸時代のものと思はれる。正面五間の中三間は板唐戸、兩脇間は櫺子窓、兩側面は四面共に壁、背面は中央間のみ板唐戸、他は壁となつて居る。正、兩側面に椽あり、正面三間に向拜があり、科拱は和樣三つ斗、その上に刳形のある實肘木を置き、正面中三間には中備に斗束があり、その上にも同樣の實肘木がある。内部は四方一間通りが外陣で、その正面通りは板扉で區劃してある。内陣後寄の中央

八幡神社本殿

正斜面

奈良縣生駒郡伏見村大字西大寺　三間社流造　屋根檜皮葺

西大寺の西方十餘町の山中に在り、西大寺の鎮守であるが、その創立等の由緒は明らかでない。正面三間側面一間本殿は總圓柱、斗栱、舟肘木、前後に虹梁を渡し、その上の妻部には叉首束を組む。舊時の懸魚あり。正面通りに勾欄付椽、その兩端脇戸付、中央一間に昇勾欄付木階あり。向拜柱は大面取角柱、二列八本、科栱三つ斗、背面軒先にも支柱がある。軒一重、もと檜皮葺であつたのであらう。形式、各部の手法に見るのに室町中期のものである。木割が大きく爲めに小建築であるのにも係らず重みがある。

に和樓須彌壇を設け、その上に春日厨子を置き、中に本尊十一面觀音像を安んじて居る。天井は平組格天井である。

六五—六七　西　金　堂

全形　是飾
内部構架

桁行三間　梁間二間　單層　屋根切妻造　本瓦葺

西金堂は今藥師如來を本尊とし、寺傳に天平三年建立と言ひ、樣式上その頃のものと信ぜられ、本寺草創の伽藍中の唯一遺物である。但し鎌倉時代本寺再興の時卽ち正應元年戒恵上人の手による大修補を經て居る。本堂の前、西方に東面して立つ。總て圓柱、實肘木、平三斗、二重虹梁と蟇股とで構架してある。梁木、母屋桁丸桁共に圓形、軒二重樓、正面中央間には添柱を著け低い格子戸を嵌め、その左右脇間は孰れも飛貫、腰貫間を兩柱まで一杯に連子窓とする。左右兩側面二間は孰れも壁、背面中央間は同じく添柱を立て棧唐戸を著け、その脇間は共に壁である。內部は土間で天井は化粧屋裏を露はす。

この構造は大體は天平のものであるが、部分には修造せられて居る所が多い。卽ち柱にも取換つたものがあり、頭貫はその木鼻に天竺樓の樣形があるのでも明らかなやうに鎌倉時代のものであり、虹梁肘木、斗等にも大いに修補があり、屋根の大棟の反りにも同じく大きな改造がある。その新舊取交つた對照も面白く見られるが、彎曲の强い虹梁、下端の樣形のゆるやかな肘木、高さの高い斗などが確かに天平期のものとして見出される。

天平時代の建築遺物の中で最も規模の小さく、殿堂といふよりは寧ろ八脚門と言ひたげなものである。如何にも修補の多いのは遺憾であるが、よくも保存されて來た幸を祝福すべきである。

六八、六九　講　堂（經藏）

全形
內部構架

桁行三間　梁間二間　單層　屋根四注造　本瓦葺

寺門を入ると左手の一隅に西面して立つて居る。現在講堂と呼び、文殊菩薩像を本尊として安置して居るが、原は經藏であつたのである。玄昉が請來した一切經を藏めた本寺最初の經藏——それは恐らく校倉造であつたらう——は何時湮滅に歸したか明らかでない。今のこの堂は樣式上鎌倉時代中期の建立と思はれるから、本寺再興の折既に記したやうに興正菩薩法弟戒恵上人が大いに本寺の諸堂を復興した時に再建せられたものと思はれる。現在は正面三間の中央間は菱左右脇間は格子板戸、兩側面共正面寄に棧板戸を著けて居るが、これ等の板戸の處は皆壁であつて經藏の態を成して居たのを明治年間の改修によつて現在のやうにせられたのである。卽ち講堂とせられる爲めにかく改造せられたのである。小建築であるのに床が高いことなども經藏として造られたものであるからなのである。科拱は三つ斗でその形に鎌倉時代の特徴を現はして居る。さうして肘木には捧刳りがあり、下端の曲線は肘木の上端まで一つの弧線を成すなど唐樣のものがあるのに、頭貫の木鼻が天竺樣なのを見ると兩樣が混交されて居る譯である。このやうな例は奈良では年代の早いところでは延應頃建立の東大寺鐘樓に於いて見られるのであるが、本堂は形式がかの鐘樓と似て居るから相近い頃の建立であり、この種のものでの古い例として注目すべきである。

各間共中備に斗束があり、軒二重繁棰、側面の頭貫の下には櫺子が入つて居る。柱は本屋のは總て圓柱、向拜柱は大面取方柱、內部は床は拭板敷、天井は化粧屋根裏を露はして居る。構架は前後に大虹梁を渡し、更にこの虹梁の中央に向ひ側面中央柱から虹梁を架け、大虹梁の上には合掌を組み、大斗、肘木をもつて棟を受ける。この虹梁、合掌の構架法は古くは奈良朝にも行はれ、又當代にも時に用ゐて居るが、簡潔にして面も力あるものとして面白く、小建築である本堂に於ては殊にそれが利いて居る。向拜は同じく鎌倉時代のものと思はれるが當初はなかつたものらしい。

七〇　五重塔婆

全形

木造
全高　十三尺三寸　九輪高　三尺九寸
初層軒出寸　四尺一寸　五尺六寸　五尺一寸
四尺五寸　三尺六寸

これは傳へて西大寺五重塔の模型と言ふが、西大寺草創の時よりは古い頃の樣式に作られて居る。また模型と言ふことはその內部に剎柱もなく、科拱等も露れて居ないから嚴重な意味では謂へず、これは寧ろこれとして獨立したものと考へるべきもので、所謂舍利塔として作られ、內部に舍利を安置し、地上に建つ塔と同じ意味は有ちながら堂內に置かれて居たものではあるまいか。現に鎌倉時代では興正菩薩及びその徒が本寺を興隆した時、本寺を戒律の道場とし、この塔に舍利を納めて西金堂に安置し、同堂の本尊としたと傳へ、近年までこの塔はその堂に安置せられて居たで居る。こゝから見ても、この時を遙か遡つて奈良朝でもそのやうに舍利塔として作られたものかと思はれる。

各層共方三間で、法隆寺塔や藥師寺塔に於いてとは異つて上層に於いて間を減じて居ない。柱には五重塔エンタシスがあることに依つて先づ奈良朝以前のものであると知るが、科拱が三手先であることに依つて法隆寺塔などまでは遡れないものと考へられ、次いで各層に小天井はあるが、支輪が無いことに依つて、この兩方を備へて居る唐招提寺金堂、當麻寺塔、三月堂などより一段前の樣式と考へられ、こゝに本塔の建築史上の大體の位置が定められるであらう。卽ち本塔は以上の諸點に於いてかの藥師寺東塔と全く同一樣なので奈良朝の早い頃の樣式を備へて居るのである。

なほ詳しく見て行くのに、肘木には藥師寺塔のものにあるやうなその下端の否——それは法隆寺塔などの肘木に見るかの雲形の名殘だと言はれるもの——は無い。隅科が天平のものに於いて始て見る鬼科でなく普通の科であることは藥師寺塔に同じい。法隆寺塔に於いて現はれず、藥師寺塔に於いてこれを見る中備の斗束はここには無い。一手二手の肘木の下端を迷ねる線及び屋根の勾配は孰れも奈良朝のものに見る處と同じい。軒は二重、地棰圓形、疎擔棰、本方形、各層に付いて居る勾欄は丈高く、その架木、平桁共に反りがなく、端を垂直に切り、束は擂形を成すことは法隆寺塔等のもの只來の右側で藥師寺塔、當麻寺塔にもこれを見る。平桁、地覆間の組子は橫連子である。尙內部は初重にのみ天井を張り第二重から上は打通

して居る。刹柱なく、枓栱も露はれず、板を張るのみである。

本塔はかく細部に到るまで前遇の判定に從ふもので、卽ち樣式上桑師寺塔に最も近いものである。さうして奈良朝の早い頃の建築はこの二つ以外に極樂院のこれと同樣な小形な五重塔を加へて三つだけを擧げ得るばかりなので、史上尊い遺物である。さうして本塔はこのやうな謂はゞ模型的の小塔であるのにも係らず、たとひ內部には手を省いてこそ居れ外面には部分迄よく建築形式を完備し、時代樣式を現はして居り、而も形態定好に、よく塔の美しさを現はして居るのは賞讃すべきことである。勾配心持よく緩やかな屋根の重々の節奏——具體的に言へば各層の大きさの比と各層の距離の釣合——が整つて美しく、五重の軒端が綺麗に一直線上に列んで居るのは餘りに整ひ過ぎて居るかの思さへする。屋根のみではない。それと共に軒、枓栱、柱さては勾欄などまでくるめての外觀上一切の建築構造、それが大地から立ち上つて質量を現はしつゝ、內容を暗示しつゝ、初重から二重へ、二重から三重へと層々次第に相重なり、昇つて行つて、最後に九輪となつて虛空に碧える——その塔の美しさをよく現はして居るではないか。

尙本塔內には紙本墨書の法華經二卷が漆塗文箱に入れて納設されて居る。その箱の底に、弘安七年潤四月十八日末時書寫僧禪海と墨書した付箋が付いて居る。又塔直下の方形臺の內部に永仁五丁酉九月廿日修理之　大工季國奉行僧玄智、との墨書がある。弘安と言ひ永仁と言ひ何れも本寺再興の時に當る。僧禪海、玄智等に就いては明らかでないが何れも戒惠上人の徒として本寺再興の業を成した人々であらう。又本塔は明治四十年に修理が加へられて居る。九輪はこの時その殆んど全部を補造されたものである。

七一　舍利塔　全形

銅製　鍍金

高一尺一寸一分　寸法　六寸三分

舍利を水晶珠中に收め、これを精粗ともどもの工技を現はした蓮座の上に安置する舍利塔は本堂中既に西大寺の數點を見て來て居る。本寺のこれもそれ等と一組の鎌倉時代の製作で、而も普興正菩薩に深い關係のある寺院に藏せられて居るのは注意すべく、彼の深厚な舍利信仰が思ひ合される。

さてこゝに掲げた海龍王寺の舍利塔は臺座底面に海龍王寺常住大願主比丘實忍　正應三年七月日　小工白河守眞　小工室町道一彫工七條昇運　大工白河行圓の銘がある。卽ち本塔は本寺傳來のもので、正應三年と言へば戒惠上人が本寺再興の業を成してその落慶供養を行つた二年前であるから、再興の氣運の盛な中に出來たもので、本寺のこの興隆の業を記念する遺品である。願主實忍に就いては不詳であるが、叡尊、戒惠と共に本寺の再興の業に與つた人であらう。今塔を見るのに火焰は甚だ賑やかで、蓮座は花盤の下に獅子を置いて居り、鎌倉時代に佛像臺座に屢々見られるもので、蓮瓣、敷茄子、花盤、框座等は孰れも圓に見るやうにひたすら莊嚴を旨として纖細に彫刻されて居る。實に當代の金工中優秀な作品である。

不　退　寺

不退寺詳しくは不退轉法輪寺と言ひ、今奈良市法蓮町に在り。

大同四年平城天皇は嵯峨天皇に御讓位あらせられて南都に遷御せられたが後再度御位を望ませられた。併しその御志を得なかつたので今の不退寺の地に雲萠の宮を建てゝ御幽居あらせられ、やがて天長元年崩御あらせられた。よつて天皇の皇子阿保親王は畏いでこれに御住あらせられたのであつたが、承和九年親王薨去の後親王の第五子在原業平がこれを繼承するのに及んで、承和十四年詔を奉じてこれを寺とし、自作の觀音菩薩像を本尊として本寺を草創したと言ふ。本寺が又在原寺と稱せられるのはこの譯によるのであるが、造寺の由緒は天皇及び親王の御亡靈の菩提の爲めと察せられる。貞觀二年十月十五日には平城天皇の皇子眞如親王の御奏請によつて超昇寺と共に平城京の永田五十五町四段二百八十八歩の施捨を賜はり、寺基を囲うしたのであつた。爾後一千八十年、時に興廢あり、今後に佐保山を控へ、四圍に古松を繞らしたいと閑寂な境地にあつて、南門を入れば荒れ果てた園池の邊に僅かに本堂の甍破れ軒も傾かうとし、多寶塔のその上層を失ひ下層のみ殘し而も樣も朽ち落ちて居る樣は痛ましい限である。今眞宗律宗西大寺の末寺となつて居る。

七二、七三　南　門　全形　內部部分

四脚門　屋根切妻造　本瓦葺

建立の沿革は不明である。本柱は圓柱、控柱は方柱大面取、その大きさや枓栱、妻飾りの板蟇股、妻破風の懸魚や桁隱しの降り懸魚等の制式、屋根の勾配等から觀て鎌倉末期の建立と推定せられる。四脚門として特に注意せられるべきは冠木の中央に笈懸を載せて居ることであつて、その上にある花肘木と併せてその意匠が頗る面白い。四脚門は大抵この部に丈高い束を立て、その上に枓栱を置いて棟木を支へるのを通例とし、この門に於けるやうな制は鎌倉時代以後の四脚門には見られる所であるが、それ以前の遺例は珍らしく、この門の如きはその最も古いものであらう。その形は肩の張りや肩から脚へかけての急な線など妻の蟇股と酷似しよく時代の特相を現はして居る。

七四　本　堂　全形

桁行五間　梁間四間　單層　屋根四注造　本瓦葺
桁行四十四尺　梁間三十一尺八寸

境內中央に在つて南面して居る。建立の沿革は不詳である。正面五間の內中三間は棧唐戸、脇間は連子窓、兩側面は四間共壁、背面中央間棧唐戸、その他の柱間は總て壁である。側通りの組物は三ツ斗平組で、正面の中央の間で頭貫に代へて虹梁を用ゐて居ることが注目せられるが、虹梁のこのやうな用法は鎌倉時代にはなく、足利時代に屢々見られる所であり、本堂のものはその早い頃のものであらう。軒は二重樣、正面通りに板椽を設けて居る。屋根は鎌倉時代末から足利時代へかけての漸く急にならうとする頃の勾配を示す。內部

では内陣は折上組入れ天井を張り、大虹梁を設け、外陣は化粧屋根裏を露はし、繋虹梁を架す。又内陣の組物は三ツ斗出組で、それ等の制式は鎌倉時代から足利時代への過渡期のものと言ふべく、且斗栱の實肘木や枠肘木や枠肘木の縋り形に天竺様が認められることによつて堂の建築史上の位置もほゞ明らかになるであらう。内陣の二つの大虹梁各々の中央を支へて居る二本の柱はその上の天井を支へる束及び斗と共に後世に附加したものと思はれる。内陣には堂と同時の作と思はれる和様の須彌壇を設け、その上に厨子を置き、その内に在原業平の自作と傳へられる本尊聖観音菩薩像を安んじ奉る。

七五　本尊　聖観音像　全形

木造　著色　立像

像高　六尺三寸二分

一木造で、平安初期の作である。刀法は淡く穏やかであり、形態では一木彫の體を現はして體軀の上下に肥瘦の變化少なく、長身である。髪髻や天衣などに整に間の延びたところが見える。即ち一木造ながらかく手法に緩みの現はれて居るのは、製作年代がはや藤原期に近づいて居ることを示すものである。よつて本寺本來の本尊かと思ふ。さうしてその手を體から離して左右にゆつくり張つた應揚な态態衛氣のない手法はよく本像に氣品を與へて居る。著色は全部近世の修補であり、兩手手指左右冠纓の上方天衣の兩腕から左右脇に垂下する部分、持物、臺座等も後世の補作であり、光背は他の佛體のものを利用したものらしい。

七六　五大明王像

木造　著色　坐像

不動明王像　正面

像高　二尺七寸　光背高　三尺六寸五分

七七　降三世明王像　正面

像高　五尺一寸

七八　大威德明王像　正面

像高　四尺八寸

七九　金剛夜叉明王像　正面

像高　四尺九寸七分

八〇　軍荼利明王像　正面

像高　五尺二寸

五軀孰れも寄木造彩色像で同作と思はれる。肢體の肉付きがふつくらとして居り、鼻目の小むんまりとした面貌も忿怒相に似ず甚だ穏やかであり、肢體のこなしも物柔らかに安靜な五大尊像である。不動像は髪髻も平らに、柔らかな手指に持物を取る兩の手の位置や兩足の結跏の様などにも自然な又沈著な態を現はして居る。雲の衣文になか〳〵寫實的な工夫が見える。五軀の内この像のみ玉眼であるのは後に改作したものと思はれる。火焔は嬉しくも像と同時のものを遺存して居り、その炎々と燃えさかる有様を面白く現はして居る。降三世、金剛夜叉、軍荼利の三像はほゞ同形で、普通は肢體を踊躍させて甚だ動的な様字をして居るが、これ等の像では兩足を並べ立ち腰や膝を僅かに折り、裙の裾を僅かに膝頭に卷はらし、跳ね上らしめて居るのみの靜的な姿で現はして居り、又そこに密教的な神秘的な氣分が甚だ薄い。なほ降三世像が自在天と烏摩后とを踏へて居ないのを注意して置く。大威德像は六面六足といふ形の取り難いものであつて、牛に騎つて居るので始末し易い所もあるが、又その爲めに可成り複雜な形態となりもするのを、寫實的手法を加へてよく破綻なく收めて居る。かく見て來ると總じてこれ等の諸像の、このもの和らかな安靜な姿態、さうしてその穏和な手法の内に我々は藤原時代の好尚を認め、さうして寫生的な手法の散見するのをもつてすれば、その時代としても鎌倉時代に近い頃の作なるかを思ふ。五大尊の完備した彫像は古い時代の遺例が甚だ尠く、本像の如きはその作の優れて居ることゝ併せて貴重すべきものである。

八一—八三　多寶塔　全形　軒廻組物　内部天井

方三間　單層　屋根寶形造　檜皮葺

境内の東南隅に在る。圓に見るやうに單層建築であるが、もと多寶塔であつたので、何時の頃か上層が朽廢したので、下層を假にかく寶形造にして保存して居るのである。面もその下層も今また風雨に荒らされて軒も垂るみ、四隅の椽板も朽ち失せ、象腹はその骨を露はにして居る。様式は鎌倉時代の和様で、一見その小ぢんまりとまとまつた姿が人の心を引く。三間四方で中央間は脇間より大きく作つて居る。各中央間には板唐戸、脇間には連子窓を著け、柱は大面取の角柱、組物は二手先、中央間には中備に蟇股があり、軒は二重繁棒である。蟇股の上の通り肘木の上には斗を二つ双べ、天竺様とも一種異つた縋形のある實肘木をもつて桁を受けて居るが、その桁、實肘木、双斗、通肘木、單斗と次第に承けて行く内に自ら屋根、軒の重量感を減せしめ、或はそれを蟇股で左右に頭貫に流して行く意匠は面白い。又この中備一式と種、桁、斗栱、さては天竺様の縋形のある頭貫の木鼻などの軒廻りの裝飾的な作りや斗栱、種等の木割が細やかなものである上に、柱から斗栱の肘木、桁、種に至るまですべて面が取られて居る爲めに、その邊りに漂つて居る如何にも纖麗な趣はこの建築の美觀として賞すべきものである。内部は折上小組格天井を張り、その格間支輪間には極彩色の花紋や唐草文様を描いて居るがすべて建築と同時のもので、制式はすべて鎌倉時代和様の纖細巧緻なものである。上長押や方立や扉などにも同じく極彩色の文様があり、壁には篤言宗八組の像を描いて居るがこれ等はすべて近世のものである。

額安寺

額安寺は今奈良縣生駒郡平端村大字額田部に在る。

聖德太子始め熊凝村に道場を建てられ、その未成の内に病み給ふや、この精舍を大寺とすることを天皇に乞ひ、又この寺を田村皇子後舒明帝に付囑し給ふ。よつて皇子は位に御き給ふとその第十一年に百濟川側に百濟大寺を建てゝ太子の御遺志を遂げられた。この大寺は後にこれを高市郡に移して大官大寺、後又平城京に移して大安寺となるのであるが、その故地である熊凝村の精舍は熊凝寺又額安寺と稱へて今に及んで居る。これ本寺の緣起である。

天平年中額田部の人道慈律師はその氏寺であるの緣によつて本寺に住す。爾後寺勢に興廢あり。五百餘歲を經て文治二年頼朝の伽藍修造のことがあり、又西大寺叡尊及びその徒忍性、信空、慈眞等が與つて中興の業を遂げた。爾來後宇多、後醍醐兩朝の御寄附もあつたが、永正年中には細川澤藏軒が亂入して金堂、護摩堂を焚き、永祿十一年には松永彈正が又講堂、五重塔等を除すほか伽藍を燒き、慶長二年には秀吉が大塔を攝州四天王寺に移し、次第に寺觀が淋れ秀賴が殘存の講堂坊舍門廊等を修理したことはあつたが、その後興隆の力なくして今日に及び今僅かに本堂、庫裡等を存するのみである。本尊を十一面觀音とし西大寺末に屬し眞言律宗を奉じて居る。

八四　虛空藏菩薩像　正面

夾紵　著色　坐像

像高　一尺七寸　臺座高　一尺二寸五分

虛空藏堂の本尊である。その蓮座の受板の上面に掃圖のやうな墨書の修理銘記がある。即ちそれによるとこの像は道慈律師の念持佛で、彼が入唐して善無畏三藏から傳承して來た求聞持法の本尊である。この法は秘法としてやがて淸議護命、勤操弘法諸家に次第に流通して來るので、本像はその根本の本尊として古來尊崇が厚かつた。然るに本像が弘安五年に至つて五百餘歲の年月に佛體は幸にほゞ全かつたが彩色の剝落が甚しかつたので、繪師法橋明澄をして佛體並に臺座等の彩色を修補せしめ、佛師法橋善春をして寶冠光背持物等を新造せしめたのであつた。十一月一日修補の功が成り、同二日その頃大いに古寺の保存再興の業をなした西大寺興正菩薩がこれを開眼供養したのであつた。さうしてこの中興の賢としてこの由緣のある本像はよく今日に傳へられたのであつた。

さて像は我國で奈良朝特有の夾紵法によるもので、小像ながらその面貌にも衣文にもよく唐式の端麗なところを現はしたもので、形態の經りも美しい。臺座が蓮瓣に後補を交へながらほゞ完存して居るのも嬉しい。光背は銘文に傳へて居る弘安年中のもので、その大圓板であるのは最初からのものを承け繼いで居るか否か不明であるが、奈良朝にその例を見ず而も密敷式であるから或は變改せられたのかも知れない。後補の彩色文樣寶冠等がまた鎌倉時代の堅實な作風を現はしよくこの像を莊嚴して居るのも賞すべきである。

八五　文殊菩薩騎獅像　全形

木造　著色　坐像

像高　一尺八五分

一木彫で、獅子も同作と鑑せられ、藤原後期の作である。彫法素朴、その小ぢんまりとして童子を見るかのやうに現はして居るのは藤原後期から見られる時代の好尚である。たゞまだ五尊の種兒文殊となつては居ないので、その過渡の形式と考へ得て興味深く、その楚楚とした容子にも愛すべきところがある。

八六　熊凝精舍班田圖

麻布

縱　三尺六寸　橫　二尺二寸七分

墨描であるが建築などには朱を用ゐて居る。恐らく奈良朝のもので、班田圖は他に古遺物なく、もつて貴重せられるべく、又地圖としてはかの正倉院御倉の東大寺山堺圖と並び稱せられるものである。

寶山寺

寶山寺は奈良縣生駒郡生駒町にある。役行者の草創といふほか近世までのことは明らかでなく、延寶年中比丘淇海がこゝに登山して、行者の靈蹟般若窟に苦行し、遂に貞享五年伽藍を經營し、こゝに始めて寶山寺の寺號を樹てた。元祿十五年東山帝の勅願所となり、以後續いて皇室の御尊崇を辱うして居る。今本堂、獅子吼堂、觀音堂、如意輪堂等があり、殊にその歡喜天は遠近に信仰が甚だ厚い。寺寶は多く寶山比丘以降その有に歸したのである。

八七—九〇　彌勒菩薩像　全圖　部分　同　同

絹本　著色

竪　四尺八寸一分　横　二尺九寸三分

左手には寶塔を載く蓮花を執り、右手は與願の印を作す形相で、これは奈良朝又は平安朝初の古彌勒像にも見た處であつた。これをこゝに寶藍の下に蓮座に坐し、斜面に、且やゝ俯むく樣に描き現はして居る。さうしてその斜面するのに差出した右手の方を向かしめてあるので、與願の心持が具合よく表はれて居る。著しく長い冠纓がその飄轉する内に胴體と兩手足との抱く空間を說き現はして居るのも、それが兩腕を越えてもなほ飄轉して左右に擴がつて蓮座の瓣に懸らうとして居るので像を蓮座の上に落付かしめる處のあるのも、またこの冠纓の飄轉がこの菩薩像の表現内容を流動的に人に傳へて居るのも興味深く見られる。裳の一端が蓮瓣に垂れ懸つて像と蓮臺とを迚ねて居るのも作者の技巧かと思ふ。更には天衣が兩肩から腕に懸つた後花足の構へ安らかに像を受けて居る臺座の兩側に垂れて地に到つて居るのは珍らしい例であるだけに、それが本像を直接に地に靜めようとする作者の働きかと思ふ。

製作は張りの餘りなく和らか味のある朱色鐵線をもつて象られた肢體は肉身柔軟な趣致を帶び、豐滿にして構へが大きく、法隆寺壁畫のもの——殊に南側東寄の小壁の菩薩像など——に似て、それに倣つたかのやうな處もあつて、唐式な處を多分に有つて居る。後光臺座共に大形である。それに從つて手法も古致で一體に簡素で、筆數は例へば寶冠、環珞鐶釧などにしても粗で、かの帝室博物館藏の普賢菩薩や長保二年作と思はれる東寺十二天などの精密なものとは趣を異にし、又文樣は衣裳にはこれを全く置かず、臺座のは極く手粗く、又金を用ゐない。これ等の諸點に於いては類品少なく、その豐滿にして柔軟な形相や粗略な筆致に於いては、益田男藏十一面觀音像に似て居るやうでもあるが、粉飾に於いてはその精粗甚だ相距つて居る。さうして本像はその製作時代では古式を有ちながら藤原時代より上らず、と言つて益田氏十一面像との比較に於ける如く又博物館普賢像や野山涅槃その他藤原期佛畫に見るやうな精彩や淳樸敦厚な趣致を帶びること乏しく、その優雅に見える姿態内も熟視すれば生氣に缺け、冠纓天衣の飄轉や臺座の蓮瓣の張りや裝飾などには强健な鎌倉趣味の見られる。かくてこゝに右圖によつて鎌倉期に入つて製作されたものかと思はれる。

PL. 1 門 樓

PL. 2 全 全

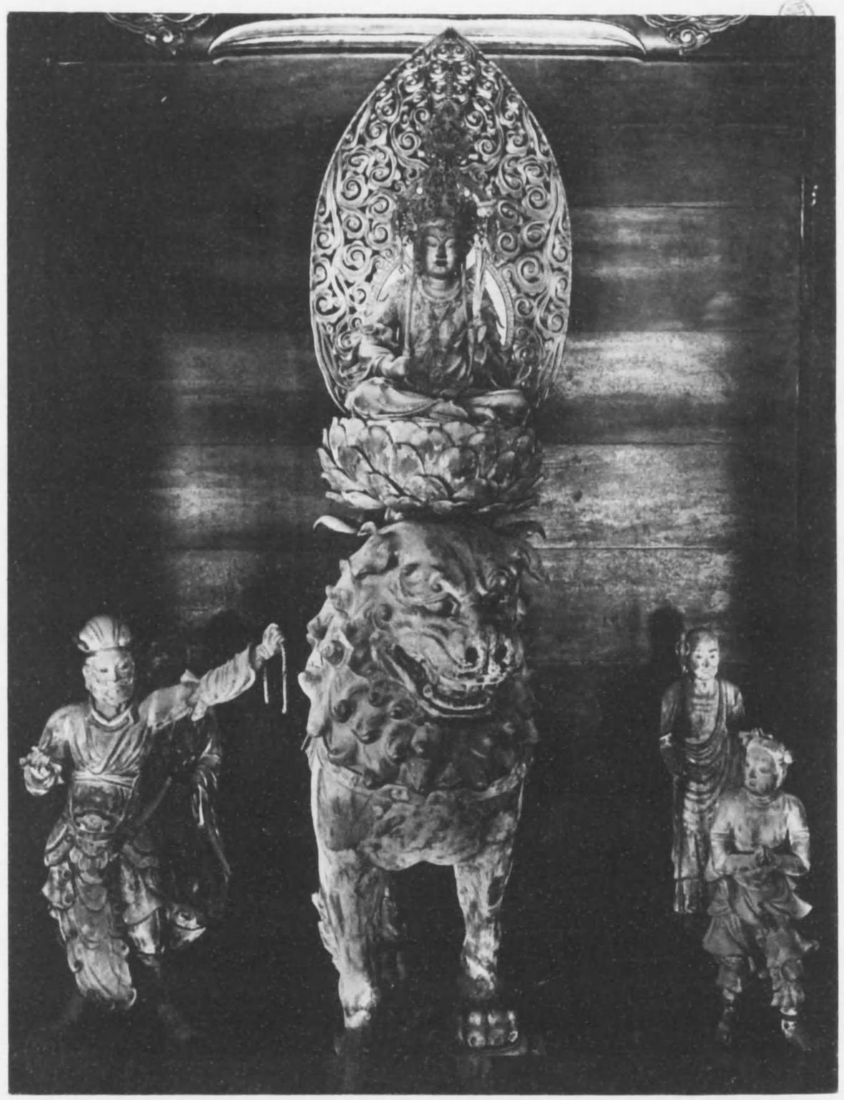
PL. 3 法東妙海時 堂金

PL. 6

PL. 4

法米如來像 金銅

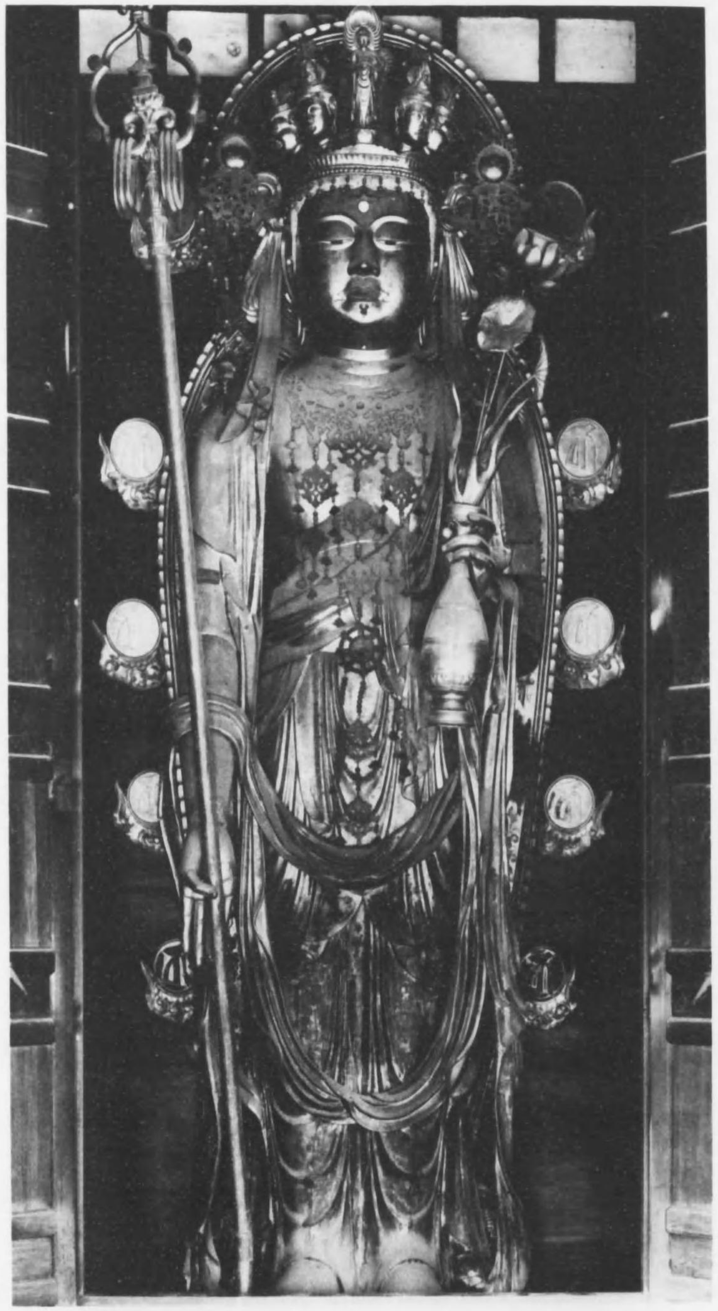
PL. 6 保福寺勢至 全身



PL. 7

PL. 9 [illegible]人老婆[illegible]尼[illegible]文 金金

PL. 8 [illegible]三村[illegible]陀佛[illegible]文 金金



PL. 10

千手觀音菩薩像 一十 宋土四

PL. II

像天間多　　像王天四　金王四　　像天四持

PL. 12

PL. 13

增長天像　　廣目天像　　四天王天像　　持國天像

PL. 14

後王天四　後王四
後天長增

PL. 16

PL. 19

PL. 18

PL. 20

PL. 21

PL. 22

PL. 23

後東如生貴 後陵四

PL. 24

段來如陀佛河 段德因

PL. 25

降三世明王愛　金剛愛

PL. 26 行基菩薩

PL. 27

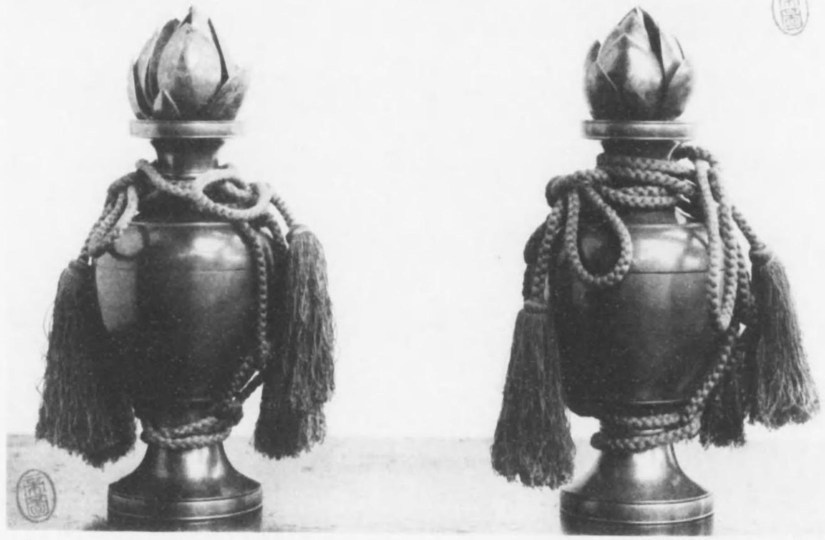
PL. 28

東京都立中央図書館蔵

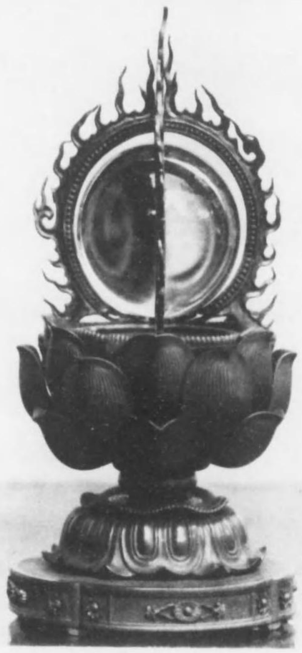
PL. 30

PL. 31

PL. 32



PL. 33



PL. 36

PL. 34

五輪塔村

PL. 35 塔 頂

PL. 37

PL. 38

PL. 39

(塔刹全景) 咲 貴

PL. 40

PL. 41

刀大 足象 平方 印位

金光明最勝王經序品第一　　三藏法師義淨奉　制譯

如是我聞一時薄伽梵在王舍城鷲峯山頂
於最清淨甚深法界諸佛之境如來所居與
大苾芻衆九万八千人皆是阿羅漢能善調
伏如大象王諸漏已除無復煩惱心善解脫
慧善解脫所作已畢捨諸重擔逮得己利盡
諸有結得大自在住清淨戒善巧方便智慧
莊嚴證八解脫已到彼岸其名曰具壽阿若
憍陳如具壽阿說侍多具壽婆澀波具壽摩
訶那摩具壽婆帝利迦大迦禰婆優樓頻螺

金光明最勝王經卷第十

[illegible]

總去例[illegible]胡即鵝仕子擒臣令鋌迹頂瘠情曾捫胡本硬夷吉

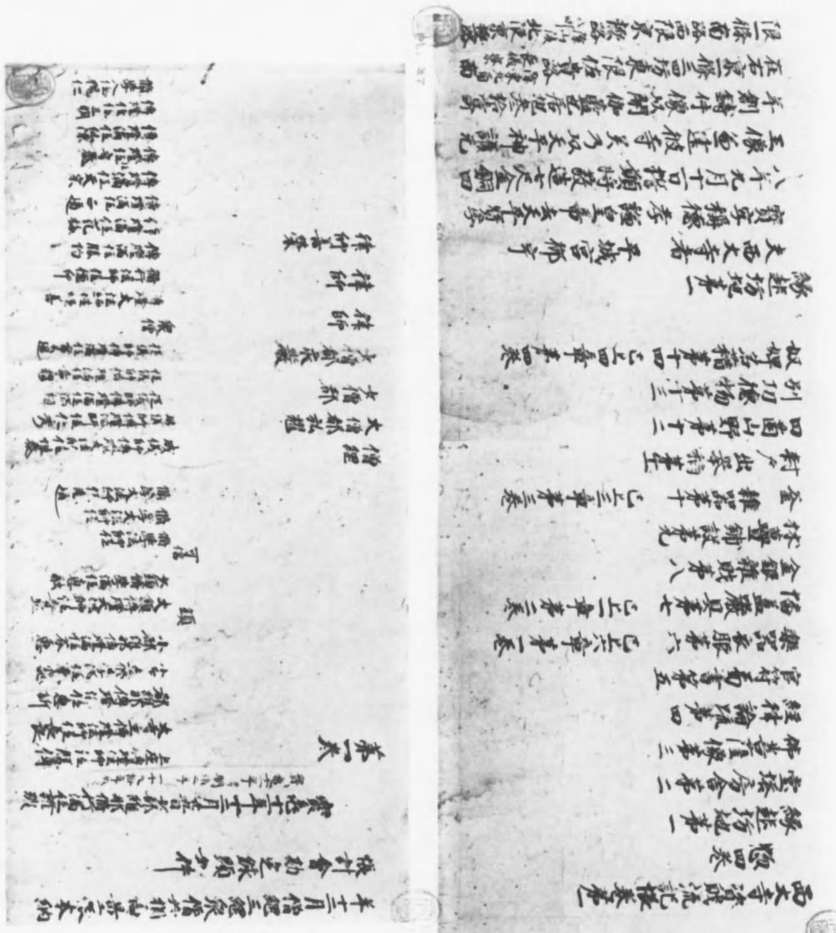
維天平寶字六年歲次壬寅二月八日菩薩戒佛
弟子百濟豐璽奉為　二親敬寫法華經一部
金光明最勝王經一部金剛般若經一卷理趣
般若經一卷奉願藥師經一卷合廿一卷莊嚴既
了　伏願憑斯勝因奉資冥助永庇菩提之樹
長遊般若之津　又願上奉聖朝恒延福壽下
及寮采共盡忠節　又璽自發誓言和濟沉淪
勤除煩障妙窮諸法早契菩提乃至得證无
窮流布法界聞名持卷獲福消災一切迷
方會歸覺路

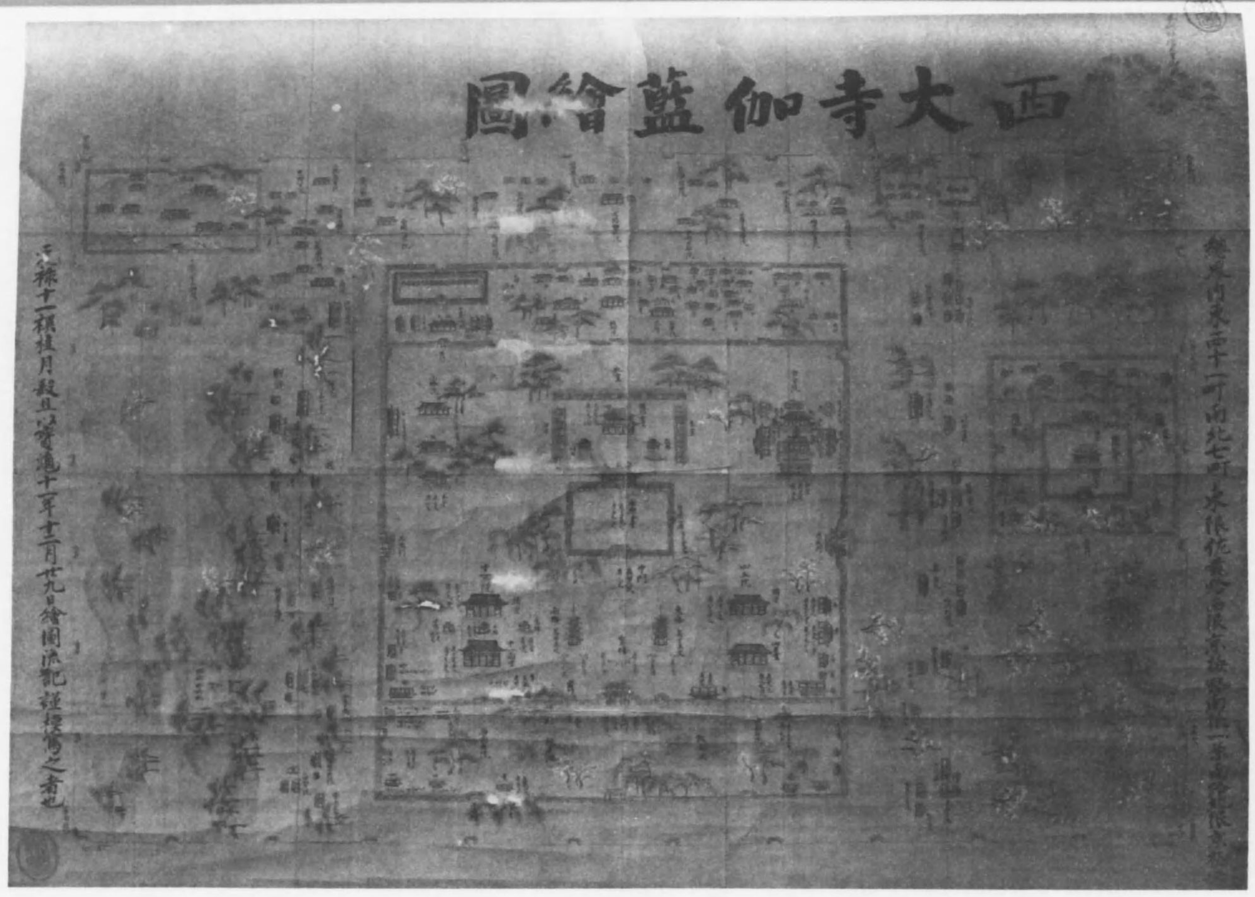
PL. 44

PL. 45

觀自在便現其前隨所願求皆令滿足若欲
自隱應呪雌黃或安緒那滿八千遍研以塗
眼若欲乘空應用塗足由斯呪力證不空智
而為上首莊嚴等持既獲此定凡作事業无
不成辦尒時世尊讚觀自在菩薩摩訶薩言
善哉善哉汝能憐愍一切有情說此神呪欲
令皆得利益安樂我深隨喜時薄伽梵說是
語已觀自在菩薩摩訶薩淨居天衆自在天
衆大自在天衆大梵天王及餘天衆聲聞菩
薩皆大歡喜信受奉行

不空羂索神呪心經




西大寺伽藍繪圖

PL. 50

注進　西大寺修僧房通利三寶斯田島田等事

大和国為上郡内三四五条之内庄一所　号新井庄　坪付在別

添上郡東京六条四里十坪　十三段

山邊郡南郷十三条六里十四坪　十邊五段

件庄所敷在水田六段皆庄尊寺　[illegible]

天福二年甲午六月日為常寺富院持僧僧年入来

右京一条四坊二坪三百歩

去嘉元年[illegible]為尊円上人之沙汰寄進之

右京一条三坊一坪二段

去嘉元年[illegible]為尊円上人之沙汰寄進之

右京一条二坊九坪一段小

迎應二年庚子二月六日為聖教用途[illegible]僧年入之

右京一条二坊九坪一段百廿歩

迎應二年庚子三月三日坪治家景寄年入之

添下郡秋篠坪内三条三里一坪二段

仁治元年庚子十月十日興慶　識慶房年入之

右京一条二坊北邊十坪　南路一段

仁治三年壬寅二月廿二日　教尊　年貢之

高市郡北郷五条六条上里十九坪　南路子　[illegible]

四里廿四坪　此　字多ノ[illegible]

PL. 51

[illegible]

西大寺[illegible]

添下郡右京二条四坊十六坪内一段半　字[illegible]

添下郡右京二条三坊十四坪内一段　字平

添下郡右京二条三坊南大路二段

添下郡定田郷内潘宮居田一町一段内三段

添下郡定田郷内一段　字長橋

添下郡右京三条二坊十五坪一段　字長橋

已上六所九段半

永仁六年戊午三月十五日　近後東参動是明年十月迄新

右京一条四坊九坪東大路　[illegible]

永仁六年五月　日　[illegible]

添下郡右京三条　三段　[illegible]

永仁六年五月　日　自[illegible]

去文永十一年甲戌十月廿日　依光師和上

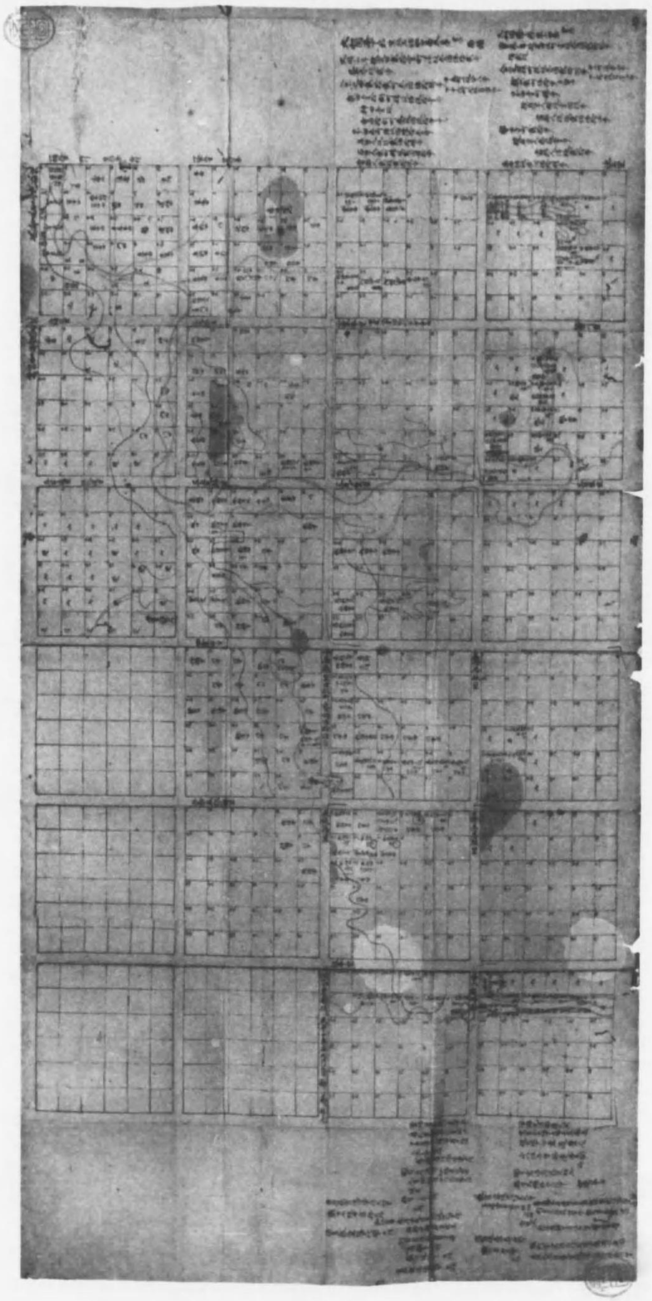
御令旨譲渡任持注進其後所寄西園令為

三寶久住重記録之畢　[illegible]

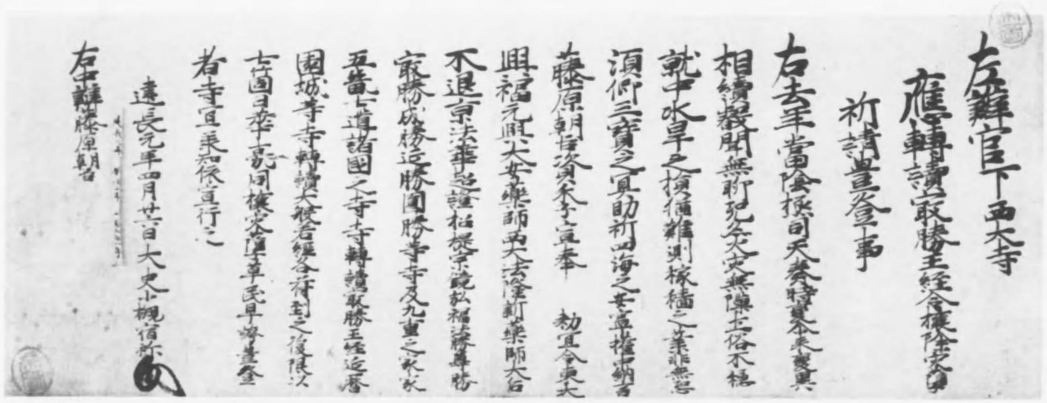
永仁六年戊申十二月五日　比丘[illegible]

PL. 52

慶應義塾大学図書館



PL. 83



左辯官下西大寺

應轉讀最勝王經令護除災事

祈請豊登事

左去年當陰旱間天奏時雖奉來奏與

相續穀價無祈死之人交無識之俗不極

就中水旱之損猶難測旅穡之業能豊

須仰三寶之眞助祈四海之安寧擬中朝者

藤原朝臣資人宣奉　勅宜令東大

興福元興大安藥師四天王薬師新薬師大官

不退寺法華寺誕生寺招提寺弘福寺勝尊院

最勝成就院護国勝寺寺及九重之家家

五畿七道諸国之上寺寺轉讀最勝王經護摩

国城寺寺轉讀大般若經令祈到之後限久

古国司等宜同被令護摩草長早海基登

者寺宜奉知依宣行之

延長元年四月廿日大史小槻宿禰

左中辯藤原朝臣

PL. 66

PL. 67

PL. 58

PL. 59

PL. 61

[illegible]

PL. 62

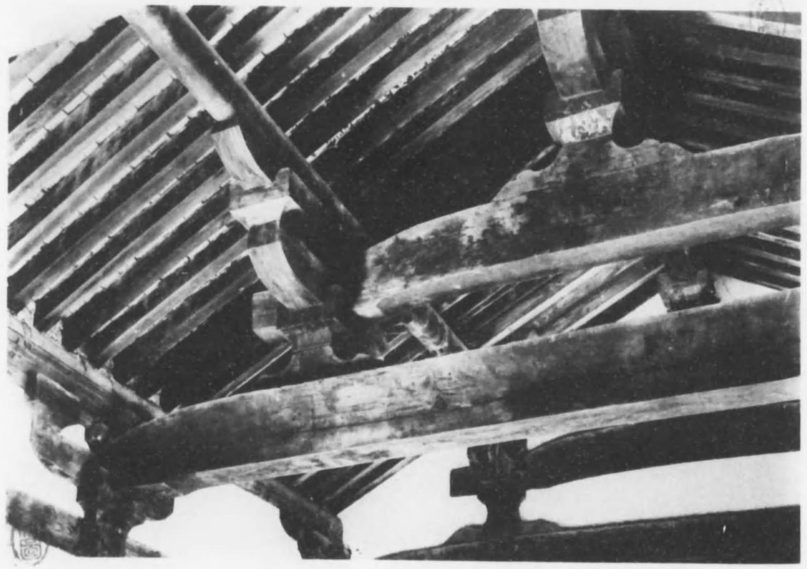
PL. 52

四天王寺本

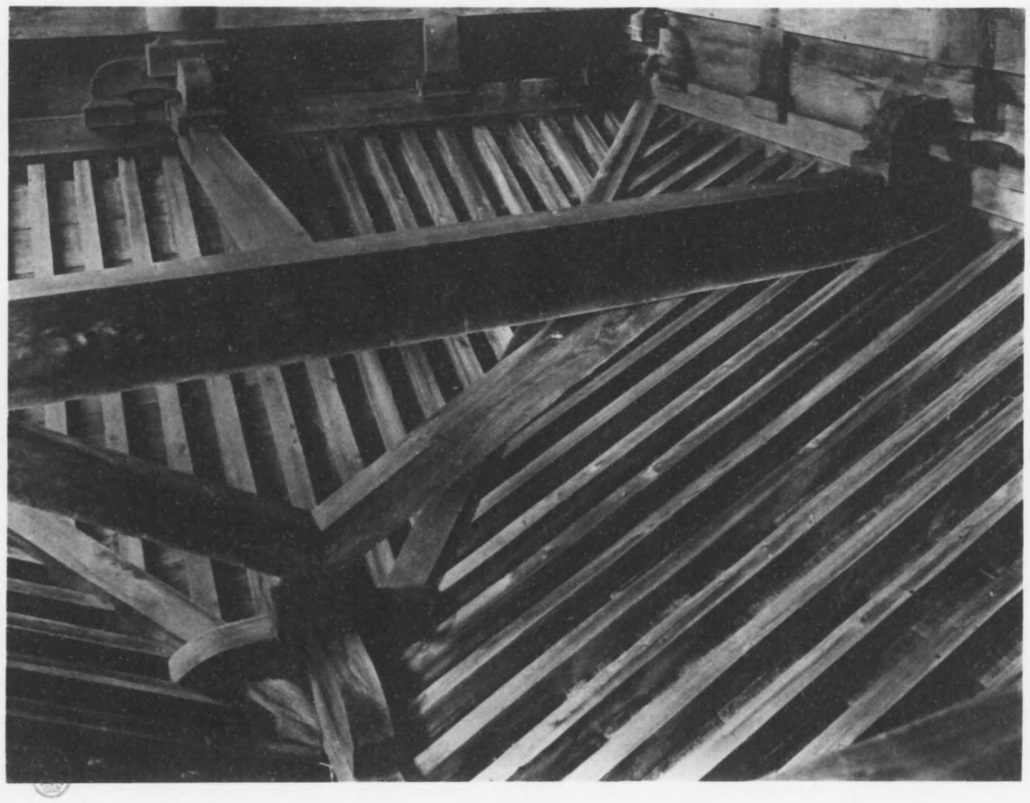
Pl. 64

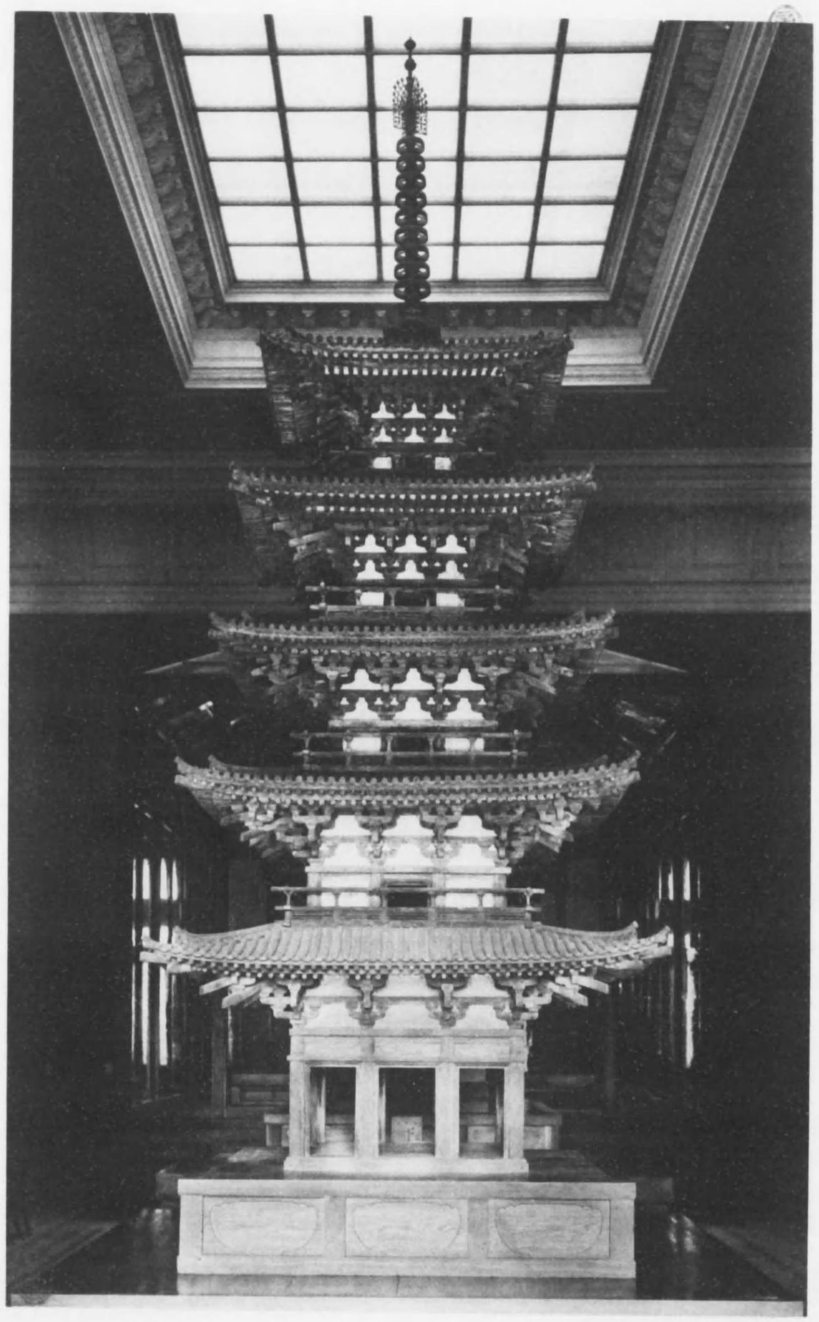
PL 65

PL. 66



PL. 67





PL. 70

法隆寺五重塔正面

PL. 71

塔利合　金玉龍海

PL. 72

PL. 73

門扉 李朝末

PL. 74

PL. 75 [illegible] 全体 [illegible]

PL. 76

後白河請不　王明大五　寺組不

PL. 77 後五明佛三尊 五明大元 寺眼寺

PL. 78

像王明德誠大　宝明大正　寺温不

PL. 80 GUARDIAN OF THE EAST

PL. 79 GUARDIAN OF THE WEST

PL. 82

PL. 83

PL. 84

後漢立佛金像 古安徽

PL. 85 像胴納経菩薩文 寺安蔵

PL. 88

[illegible]

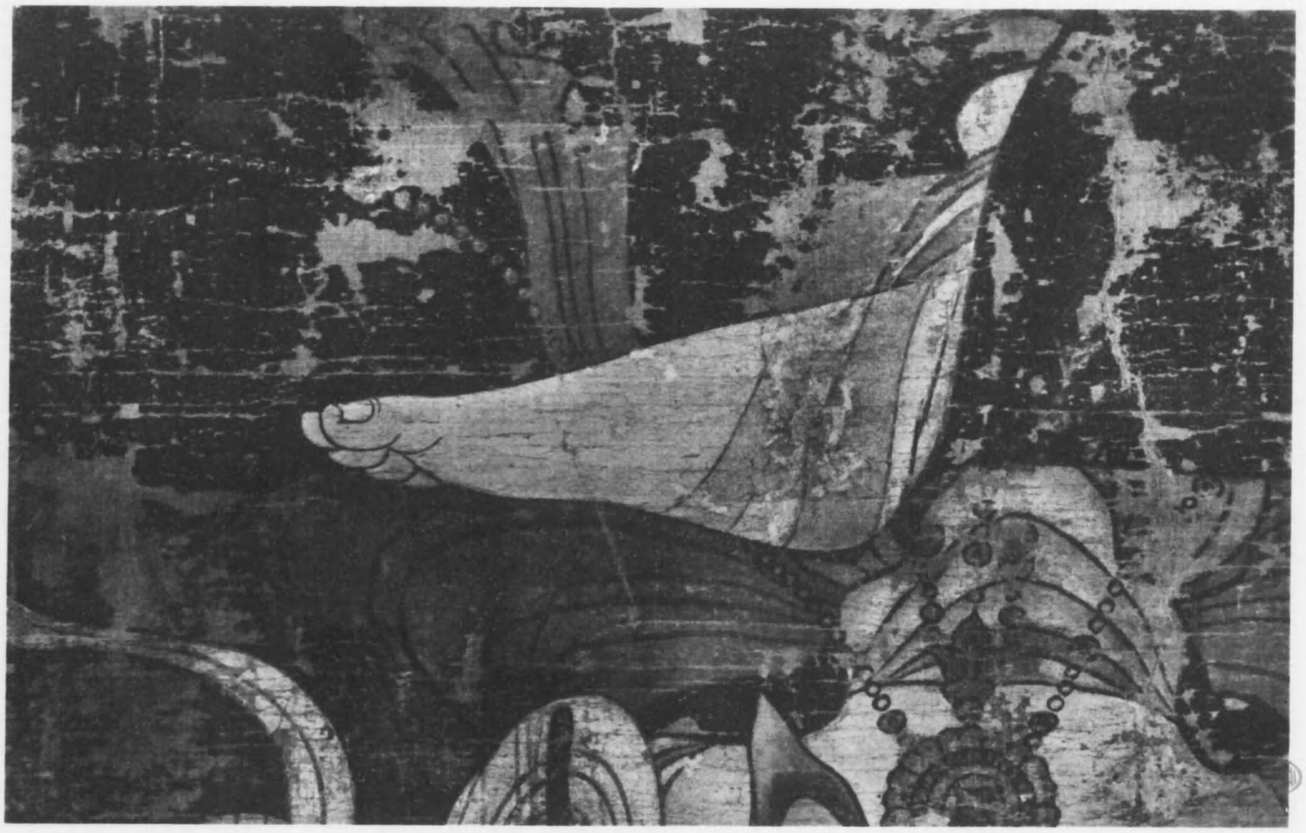
PL. 67　　観音菩薩像　寺山寶

PL. 89

壁画菩萨像 寺洞窟

PL. 89

敦煌莫高窟 李山雪



CATALOGUE
OF
ART TREASURES
OF
TEN GREAT TEMPLES OF NARA

VOLUME TWENTY THREE

THE SAIDAIJI TEMPLE

PART I

THE OTSUKA KOGEISHA
TOKYO
1933

ART TREASURES OF TEN GREAT TEMPLES OF NARA

VOLUME XXIII

THE SAIDAIJI TEMPLE

PART I

The Saidaiji Temple

In September, 764, the ex-Empress Kôken made a pious vow to cast bronze statues of Shitennô (Four Horizon Gods) seven feet in height and erect a temple to install them. In the next month she ascended the throne for the second time and in the following year successfully caused the images to be cast and housed in the newly raised Saidaiji temple. It contained such principal buildings as the Shidaikondôin, Jûichimendčin, Shiôdôin, Shôtôin, Jikidôin and scores of subsidiary structures like the Seinankakuin, Tônankakuin, Seishoin, Shimain, Shôsčin, Hôin *etc.* To it also belonged a nunnery called the Sairyûniji. Thus the Saidaiji temple became so great an institution under the Imperial patronage as to rank with the Tôdaiji temple erected by the Emperor Shômu. The Empress Shôtoku frequently visited the temple; all classes of people vied to make votive offerings; in this way it commanded the veneration of all the public. The decline of its fortunes began with the death of its patron Empress Shôtoku in 770 and then the capital being removed to the north, it fell into decay. To make the matter worse, several fires broke out to destroy its buildings and images in 1506, 1520, 1597 and 1598. The result was that the mighty monastery raised by the Imperial devotee gradually declined in prosperity and is now a mere shadow of its former greatness, partly because it could not always enjoy the protection of the Court or a great family like the Fujiwaras in the same way as the Tôdaiji and Kôfukuji temples did. In process of time, however, Fortune began to smile upon the Saidaiji. After about four hundred and seventy years of its foundation Priest Yeison (1201–1290) otherwise called Kčshô-Bosatsu came to live here to expound the doctrine of the Shingon-ritsu sect in 1235; he strove for the restoration of its prosperity. His distinguished merits in conducting grand devotional services during the national crisis of the Mongol Invasion and the patronage he enjoyed at the hand of successive emperors Gosaga, Gofukakusa, Kameyama, Gouda and Fushimi led the way to the new era of the Saidaiji temple. For it was then that all the Kokubunji temples throughout the country were put under its control, more than a dozen manors as well as many farms were endowed and a number of buildings such as the Shiôdô, Kômyôshingondô, Pagoda, Monjudô *etc.* were erected in the precincts. Then followed two hundred years of vicissitudes of fortune; in 1502 a fire destroying the Shiôdô, Pagoda, Bell-Tower, Priests' Apartments and so on; in the Tenshô era Hidenaga unlawfully seizing upon its land, but in 1602 the Tokugawa government making a donation of a farm yielding annnually three hundred *koku* of rice. During the Genroku and Shôtoku eras the Saidaiji temple again showed signs to rally only to fall into its final decline as we see at present. The dilapidated aspect of its damaged compounds with the Kondô, Kwannondô (or Shiôdô), Aizendô, Fudôdô and nothing else only makes us grieve its unlucky star recalling the palmy days when it was first established by the Empress Shôtoku and prospered under Yeison for the second time. Most of treasures preserved in the temple seems to have been scattered and lost. But what

remains, though only a tenth of the original collection, is well worthy of this historic institution, being characterized with peculiarities not to be seen elsewhere.

PLATE 1 THE EAST GATE
PLATE 2 THE KONDÔ

The Kondôin, which was primarily the nucleus of the Saidaiji temple, consisted of the East and West Five-Storied Pagodas, Yakushi-Kondô and Miroku-Kondô. Burnt down during the Jôgan era (859–876) it was not rebuilt for a long while until the time of Kôshô's revival of the temple, but this was again lost. The present Kondô stands on the site of the Kômyôshingondô built by Kôshô-Bosatsu and dates from the Hôreki era (1751–63). Herein is installed the image of Shaka-Nyorai, the principal deity of the Saidaiji, together with those of his attendants Miroku and Monju.

PLATES 3–5 SHAKA-NYORAI (KONDÔ)

Standing statue. Wooden and unpainted. Height, 5 ft. 6 ½ in.

Originally enshrined in the Kômyôshingondô as its chief image, the statue came to be installed in this Kondô, which was built during the Hôreki era (1751–1763) as its successor. The work is a replica of the renowned Shaka statue of the Seiryôji temple, Kyôto, brought over from China by Priest Chônen in 987. According to tradition it was made by Kôshô-Bosatsu himself, who for the purpose confined himself in the Seiryôji to offer an earnest prayer. In the Kamakura period the Seiryôji piece was held in great esteem and it was a fashion to make a copy of the work. Even to-day we still find preserved such an instance in many parts of this country. The attribution to Kôshô-Bosatsu is borne out not only by technical characteristics, but by the inventory of farms (Plates 51 & 52), in which mention is made of a newly-made image of Shaka referring in all probability to the inrage in question. The original preserved in the Seiryôji temple appears to have commanded great veneration especially among those who devoted themselves with Kôshô to the religious movement to expound the *kairitsu* rules. This is why we see extant specimens of this type in the Gokurakuji at Kamakura and Shômyôji at Kanazawa, where his influence made itself felt, and in the Tôshôdaiji at Nara, which was revived into prosperity by Daihi-Bosatsu. Of all these pieces, however, the one in the Saidaiji is most excellent, just as Kôshô-Bosatsu was the central figure of the religous movement in those days. It is constituted of a number of *hinoki* wood (a Japanese cypress). Like its prototype in the Seiryôji temple it is plain, only enriched in places with a circular lotus pattern in cut-gold leaf and with a cut-gold fringe along fold-lines. Compared with the original, it has lost something of exotic elements, but acquired a great deal of native tenderness and realism peculiar to the times. None the less it is so faithfully rendered as to remind us instantly of the archetype. Being the very best of the copies, it is remarkable for the perfection of modelling and carving, very unusual with tame reproductions. The mandorla and pedestal are of the same period. The elaborate open-work in the former is above all praiseworthy.

PLATE 6 MIROKU-BOSATSU (KONDÔ)

Seated statue. Wooden and in gilt lacquer. Height, 9 ft. 5 in.

This image of Miroku composed of wooden blocks and provided with crystals for eyes is attributed to the hand of Priest Jichin, who succeeded to Kôshô-Bosatsu as Chief Abbot of the Saidaiji. It was originally intended to be the main statue of the Kôdô, but is now placed on the eastern side of Shaka mentioned above. The general workmanship testifies to the ascription. The facial features are very beautiful; the modelling of fingers, toes and the abdomen is carefully done; and the drapery and its folds are characteristic of the dexterous and assured technique of the age, especially bold lines shown on crossed legs looking as if belonging to a single block statue and heightening the powerful expression well in accord with this huge work. The top knot and the upper part of the diadem are later additions.

PLATES 7–9 MONJU WITH FOLLOWERS (KONDÔ)

Seated and standing statues. Wooden and painted.

Height, (Monju) 2 ft. 9 in. (Sanzô) 3 ft. 5¼ in. (Old Man) 3 ft. 6¼ in. (King) 3 ft. 10 in. (Child) 2 ft. 10¾ in.

The work is believed to have been the principal image of the now lost Monjudô, but is now installed on the western side of Shaka in the Kondô. Each piece of the group is made of some blocks and has crystal eye-balls. Monju is painted gold and is clad in robes coloured on the golden ground, and the others are decorated in colours. The group is of the type called "Tokai Monju" or Monju crossing the sea, with Monju as a youth riding on a lion and followed by his four attendants——very frequently met with in our sculpture and painting since the Kamakura period. Each of the group seems to come of the same time and hand: its features, fold-lines as well as the lion are characteristic of the Kamakura style. However, a certain loss of vigour in modelling and the conventional treatment of drapery arising from too much realism seem to tell that the date is later than the mid-Kamakura period. Still it is a notable piece of work comparable to the renowned Abe-no-Monju and Kirido-no-Monju, representations of Monju of the same pattern.

PLATE 10 ELEVEN-HEADED KWANNON (SHIÔDÔ)

Standing statue. Wooden and in gilt lacquer. Height, 17 ft. 10¼ in.

Being the principal statue of the Shiôdô, otherwise known as the Jûichimendô or Kwannondô, it is installed in the central shrine of the hall, which stands to the east of the Kondô. The original Jûichimendô containing an eleven-headed Kwannon eleven feet in height was lost very early. The present work carved at the instance of the ex-Emperor Toba and primarily enshrined in the Jûichimendô at Kyôto was later transferred to the Shiôdô of this temple by the wishes of the ex-Emperor Kameyama in 1288. Thus the Shiôdô came to serve for the purpose of the Jûichimendô as well. In spite of later reparations, which somewhat altered the original beauty, it preserves in the main the style of the later Fujiwara times. The facial expression and drapery are finely rendered. The harmonious proportion shown in such an enormous work testifies to the great skill of the sculptor.

PLATES 11–17 SHITENNÔ (SHIÔDÔ)

Standing statues. Bronze (except wooden Tamonten).

PLATE 11 JIKOKUTEN

Height, 7 ft. 2¼ in.

PLATES 11–12 TAMONTEN AND GOBLIN

Height, 7 ft.

PLATES 13–15 ZÔCHÔTEN AND GOBLIN

Height, 7 ft. 9¼ in.

PLATES 13, 16, 17 KÔMOKUTEN AND GOBLIN

Height, 7 ft. 3 in.

The sacred vow of the ex-Empress Kôken in 764 to cast bronze Shitennô and to found a temple to shelter them and its fulfilment in the next year with her second accession to the throne was the origin of the Saidaiji and to the statues was dedicated the Shiôdô Hall. The hall and the images met with several devastating fires since the Shôwa era (834–847). The present Shiôdô dates from 1490 or 1711. As for Shitennô, they were consumed by fire in 860 except Tamonten and their demons. In the conflagration of 1502 the recast three images were saved, but Tamonten, which survived from the former fire, was destroyed leaving its left leg and goblin behind. The other three goblins were also saved once more. This accounts for the wooden Tamonten we see now. The three bronze figures, with a faint trace of their original gilding on Zôchôten's face, show technical characteristics and peculiarities in drapery dating from the earlier Heian period, enabling us to suppose that they were produced not much later than the fire of 860. Figures expressive of activity and motion such as those of Shitennô cost us a world of trouble in casting. Hence we have scarcely any other specimen of bronze Shitennô than this unique example. As stated above, Tamonten is wooden except its bronze demon and lower part of its left leg. It seems to have been copied from

Jikokuten in the repair consequent on the fire of 1502. All the four bronze demons, though ravaged by fire, are miraculously preserved to show the noble style of the Nara regime.

PLATES 18–19 KICHIJÔTEN (SHIÔDÔ)

Standing statue. Lacquered and coloured on wooden core. Height, 5 ft. 8 in.

This image of Kichijôten, standing side by side with Shitennô, seems to be the one mentioned in the Shizaichô of this temple compiled in 780. It is rendered in the Nara workmanship, but is also characterized with the earlier Heian manner; showing that it was produced at the beginning of the Heian period at Nara, where the ancient style still held its ground. The worship of the goddess came into a fashion from the latter days of the Nara period and this may be taken as an expression of the tendency. The chief feature of the piece was probably the beauty of colouring, but now the paints with only a slight trace of ornamental designs and tints have wholly peeled off. The graceful posture, however, reminds one of the original charms. The flesh tint is by a later hand. The wooden core is made of pieces ready in hand and not so large combined together at random. The fact reveals the transitional nature of a lacquered statue with a wooden core lying midway between a single block sculpture and a later systematised *yoseki* (knit-together) statue.

PLATES 20–24 FOUR BUDDHAS

Seated statues. Wooden and in gilt lacquer.

PLATE 20 ASHUKU-NYORAI

Height, 2 ft. 4 in.

PLATE 21 SHAKA-NYORAI

Height, 2 ft. 4¾ in.

PLATES 22–23 HÔSHÔ-NYORAI

Height, 2 ft. 5¼ in.

PLATE 24 AMIDA-NYORAI

Height, 2 ft. 5¼ in.

Temple tradition says with seeming truth that these were primarily ensconced in a pagoda which ceased to exist. It is likely seeing they make a set of four. But whether the pagoda means the twin pagodas of the Kondôin mentioned in the Shizaichô of 780 is not to be ascertained. Uniform in size and style, they are undoubtedly companion pieces and are painted in gold on the lacquered ground together with their stands, which underwent many later repairs. Their type is mainly of the Tempyô period, with something in common with the Rushana Buddha enshrined in the Kondô of the Tôshôdaiji. At the same time they have some characteristics of wooden sculpture in the earlier Heian epoch, such as reminds one of the Amida-Nyorai of the Kodô in the Kôryûji temple, Kyôto. They are therefore to be dated to the beginning of the Heian period. The expression is vigorous, with eyes slanting; the drapery-lines are rendered powerfully with strong curves——characteristic of the simple and expressive style of the earlier Heian period. The same type of execution is pronounced in the facial expression and treatment of folds covering the legs. Although there is some doubt as to the names traditionally given to the deities, they are very esteemable works being probably the earliest specimen of Four Buddhas in this country.

PLATE 25 AIZEN-MYÔÔ (AIZENDÔ)

Seated statue. Wooden and coloured. Height, 1 ft. 4¼ in.

The historic religious service conducted by Koshô-Bosatsu, the restorer of the fortunes of the Saidaiji, was on the occasion of the Mongol Invasion during the Bunyei (1264–74) and Kôan (1278–87) eras. At the report of Mongols' occupation of Iki and Tsushima Islands in 1264 Kôshô instituted the Hundred Ninnôye Service to pray for the subjection of the enemy. The annihilation of the Mongol fleet of a hundred battleships reflected credit on Kôshô and he was greatly honoured. During the second Mongol Invasion in 1281 he was again commissioned by the Emperor to perform the Aizen-Myôô Sonshôhô service offering prayers to this image of Aizen-Myôô, the chief deity of the Aizendô. On the last day of their earnest prayer, which continued for a week, the *kaburaya* (arrow with a turnip-shaped head) held by the deity flew whirring towards the west and led to the defeat of the invaders, as the legend

tells. This is said to be the reason why the deity is always represented with a *kaburaya* among other things. The piece exhibits characteristics of the Kamakura workmanship in its modelling and treatment of drapery. It is a perfect pattern of Aizen-Myôô in the period, replete with nobile expression inspite of its small size.

PLATE 26 GYÔGI-BOSATSU

Seated statue. Wooden and coloured. Height, 2 ft. 2¼ in.

Produced in the Kamakura period, the memorial statue is composed of several blocks and set with crystal eye-balls. The facial features resemble those of the statue owned by the Tôshôdaiji temple and supposed to represent the same prelate. Though somewhat inferior to the latter, the present piece is remarkable for its simplicity in treatment.

PLATE 27 KÔSHÔ-BOSATSU

Seated statue. Wooden and coloured. Height, 2 ft. 11¼ in.

The work portrays Yeison otherwise called Kôshô-Bosatsu, a great priest who revived the Saidai temple. He was born in 1201. A religious genius and man of eminent virtue, he took the lead in the reaction against the relaxed discipline and gradual neglect of *kairitsu* regulations among the priesthood since the mid-Heian period. He successfully started the revival of the *ritsu* sect in cooperation with Kakusei or Daihi-Bosatsu of the Tôshôdaiji, Gyônen of the Tôdaiji and Shunshô of the Senyûji. He came to the Saidaiji in 1235, when he was thirty-four years old, and founded the Shingon-ritsu sect. Thus the Saidaiji, which formerly belonged to the Sanron sect, came to be the headquarters of the new sect and remains so to this day. Yeison's noble character and his marvellous efforts to restore the temple into prosperity soon secured the veneration of high and low and the patronage of five emperors. His memory is still highly esteemed as the father of the restoration of the temple. He died in 1290 at the age of eighty-nine and was subsequently given the posthumous title of Kôshô-Bosatsu. This memorial statue representing an old priest and strongly built and with slanting eyes, large nose and firmly-closed mouth suggests at his noble and powerful personality. It was probably executed not very far from his times. The manner of representing his priestly robes in numerous fold-lines contrasts very finely with the realistic treatment of the facial features.

PLATES 28–32 SHARITÔ OR SHARÎRA STÛPA

Gilt bronze. Height, 1ft. 2¼ in. Diametre, 7¼ in.

According to tradition, what is contained in this *sharitô* is Shaka's true relics, which miraculously came into the hands of Kôshô-Bosatsu. And the technique of execution does point to his time. The reliquary is designed in the form of a hanging lantern unlike an ordinary sarira stûpa. In chaste finish and elaborate workmanship it surpasses almost any sharitô old and new or any metal work produced in the Kamakura period. The fine proportion, exquisite open-work ornaments around the lower part and relief on the roof both enriched with floral arabesques and a dragon and the lotus-stand and flame ornament adorning the gem on the top——all serves to heighten the unspeakable beauty of this sarira stûpa. It is regrettable, however, that it should lack something in the expression of vigour like all productions in the latter days of the Kamakura age.

PLATES 33–35 FIVE-FOLD SHARITÔ

Gilt bronze. Height, (larger one) 10 in. (smaller one) 9 in.

PLATE 36 PAGODA

Iron. Height, 5 ft. 9 in.

This five-fold sharitô consists of five reliquaries, one larger (Plate 34) and four smaller (Plate 35). They are provided each with their receptacles (Plate 33) and are placed in the iron pagoda illustrated in Plate 36. The inscription on the eight-ringed spire of the pagoda shows that the work was made by Priest Yeison in 1283. Of all specimens of a *sharitô* mentioned in the present volume, this is the simplest and most dignified and may be called the best expression of the Kamakura art, as

is evident for instance from its flame-shaped ornament. The lotus-flower ornaments surmounting the receptacles and plaited cords are each coloured differently to represent the five elements. These five cases are arranged in the pagoda with the larger one in the middle and the other four around. The iron pagoda is very similar in style and workmanship to the bronze *sharitô* made in 1270 (Plate 39). Both are noteworthy metal works of this period for the fact that their date is definitely known.

PLATE 37 SHARITÔ (ISE-SHARI)
Gilt bronze. Height, 1ft. 5⅞ in.

PLATE 38 SHARITÔ (CHOKUFÛ-SHARI)
Gilt bronze. Height, 1 ft. 10 in.

The instance resting on an elaborate lotus-pedestal is intended for Shaka's relics known by the name of Ise-Shari because it was at Ise that they came into Yeison's possession, where he was offering prayers at the Ise Shrine. The other supported by the five-pronged *goko* club contains *chokufû-shari* or relics sealed by the Imperial hand. The Emperor Kameyama is said to have done that. The former profusely adorned with the exquisite border trimmed with flame ornaments like that of a ceremonial drum called "dadaiko" is made all the more beautiful by the pedestal designed in the style of one for a Buddhist image, of elaborate workmanship not to be seen commonly. The dexterity shown therein may yield a step to the Five-Fold Sharitô, but is one of the best examples of Kamakura arts. The latter is another typical work of the Kamakura period, vigorous in execution like the five-fold sharitô and suggestive of Shingon Buddhism in its use of a five-pronged *goko* in the pedestal.

PLATE 39 PAGODA (DAN-SHARITÔ)
Gilt bronze. Height, 2 ft. 11½ in.

This pagoda resembling the foregoing iron pagoda in shape contains a *sharitô* within. In the inscription carved on the back of the square stand is written that it was made by Yeison in 1270. Thus we see that it was produced just a little before the iron pagoda, to which it bears a close resemblance. The two may be considered as standard works of the arts and architecture of the mid-Kamakura days.

PLATE 40 BUDDHIST CEREMONIAL IMPLEMENTS
Gilt bronze. Size of bells, (left) 7½ in. (right) 7 in.

The set on the left is made of bronze and the one on the right of *sahari* (a bell-metal compounded of copper, lead and tin). Both of them belonged to Yeison. The latter is said to be the one used during his stay for prayer at the Otokoyama Hachiman Shrine in 1281 and is called by the name of Suzumushi. As to date we may probably accept the attribution to Yeison's times as is popularly believed. They are both alike in workmanship and very valuable having been preserved perfectly well as a complete set of four consisting of a bell, *tokko, sanko* and *goko* and provided with a stand.

PLATE 41 SHUBI, SWORD, KNIFE AND SEAL
Length, (Shubi) 9⅞ in. (Sword) 3 ft. 1 in. (Knife) 6½ in.

The *shubi* made of hemp-palm fibre frayed except near the bottom and having a handle painted in black and white lacquer is justifiably believed to have belonged to Priest Jôtô-Risshi, the first Abbot of the Saidaiji temple. Originally a *shubi* was used by priests like a *hosshu* or a ceremonial brush of long hair to brush off insects which come to pester them during their religious practices. Later it became merely ornamental and used to be held by them during their exposition of Buddhist sutras or on similar occasions. So in this country Prince Shôtoku is said to have used one when he expounded the Buddhist scripture Shômankyô. We have four old specimens of a *shubi* in the Imperial collection, which are shaped like a round fan with a long handle. But the present piece is rather like a broom in appearance. The metal fittings on the hilt of the sword are of gilt bronze and the precious stones originally set on it have been all lost leaving their metal-washers behind. The blade is incrusted with rust. The scabbard is lacking. The metal work, though done in an old style, is deficient in vigour and the *hôsôge* design is tame and lifeless. Hence we may conclude that the sword is a copy of the

Fujiwara or a little later epoch. The knife seems to come from the Nara period and has its sheath and handle made of ivory and ornamented with gilt fittings. Lastly the bronze seal damaged by fire and deprived of its ornamental cords is an official seal as precious as that of the Hôryûji temple, now in the collection of the Imperial Household.

PLATES 42–43 KONKÔMYÔ-SAISHÔÔ-KYÔ
In India ink on yellow paper. Height, 10⅞ in.

PLATES 44–45 GOLD-LACQUERED SUTRA-CASE
Height, 5⅞ in. Length, 1 ft. 8½ in. Width, 8 in.

This sutra Konkômyô-Saishôô-Kyô complete in ten rolls has been preserved in perfection. Marginal notes in Chinese white and red ink were made in 1097. At the end of each volume is related how this and several other sutras were copied by Kudara-no-Toyomushi in 762 in order to pray for the happiness of his deceased parents and the prosperity of the Imperial Household by virtue of his pious deed. Thus the work is earlier than the foundation of the Saidaiji temple, but it is not known how it came to be preserved in this monastery. The cover made of light brown paper is original. The shaft of the scroll wooden and plectrum-shaped is painted with a floral design in mitsudasô or litharge (a combination of oxide of lead and oil). The Buddhist scripture was held in high esteem in the Tempyô era. Such a copy making a complete set and bound in an early style is rarely to be met with. The sutra-case consisting of two tiers and a lid is painted in black lacquer inside and out. It is enriched in gold lacquer with various designs, a large circle on a lotus-stand, sprigs of the tree-peony on sides and butterflies on the inside. The work, is to be assigned to the latter days of the Kamakura period.

PLATE 46 FÛKÛKENSAKU-SHINJU-SHINGYÔ
In India ink on paper. Height, 9⅞ in. Length, 9 ft. 11½ in.

It is among old Buddhist scriptures belonging to the Saidaiji temple. If it is to be identified with one mentioned in the Sizaichô Memorandum of this temple, it is contemporary with the foundation of the Saidaiji. The calligraphy is very beautiful.

PLATES 47–48 SHIZAIRYÛKICHÔ OF SAIDAIJI INVENTRY
In India ink on paper.

The Shizairyûkichô is a kind of inventory of the Saidaiji temple in four volumes made in 780 describing its history, compounds, buildings, Buddhist images, sacred books, ceremonial implements and other temple treasures as well as its manors and other landed property. Next to the Shizaichô of the Daianji and Hôryûji it is the earliest extant record of the kind, but the present copy is a later duplicate. The calligraphic style has some similarity with that of the Plan of the Saidaiji reproduced in the next plate. If they are by the same hand, it may be dated to 1698, when the Plan was copied.

PLATE 49 PLAN OF SAIDAIJI
In colours on paper.

This plan of the Saidaiji temple was transcribed in 1698 from the original Yezuryûki of 780 as the inscription tells. But the original, which was produced in the same year as the Shizaichô Inventory, has not come down to us. In the main it coincides with the accounts of the Shizaichô as regards buildings within the precincts, but it also represents the Sairyûniji nunnery, the Empress Shôtoku's Mausoleum and some structures apparently of later times —all lying outside the Saidaiji proper. However, both the Plan and the Inventory are valuable materials for students of the temple.

PLATE 50 PLAN OF SAIDAIJI OF KÔSHÔ'S TIMES
In colours on paper. Height, 3 ft. 1 in. Width, 3 ft. 7 in.

Being the so-called Plan of the Saidaiji during its Revival, it represents the temple as it was in Priest Kôshô's times. The original has not been preserved, and we cannot tell how authentic it was. In all likelihood it was founded on some trustworthy materials. Hence this fascimile serves as a good reference for historical researches.

PLATES 51–52 INVENTORY OF LANDED PROPERTY
In India ink on paper.

Being an inventory of the temple estate of Kôshô's

times, this consists of two entries in 1274 and 1288 by the prelate himself of all the estates donated to and bought by the Saidaiji from 1234 onwards and another by Kyônin in 1298 of what was added to after Priest Kôshô's death. It is invaluable throwing a light on the economic side of the restoration achieved by Priest Kôshô, which may be traced year by year in this record of the expansion of the possessions in the Saidaiji temple.

PLATE 53 PLAN OF SAIDAIJI FARM

In India ink on paper. Length, 2 ft. 7½ in. Width, 4 ft. 10½ in.

The plan represents the temple's farm at the time of its foundation. In 1313 when the Saidaiji was involved in a lawsuit against the Akishinodera as to the boundary, this is said to have been produced to win the case for the Saidaiji.

PLATES 54–57 SAIDAIJI DOCUMENTS

In India ink on paper.

PLATES 54–55 GOVERNMENT NOTIFICATION OF 1303

Height, 1 ft. 1⅞ in. Length, 9 ft. 11⅞ in.

PLATE 56 GOVERNMENT DECREE OF 1249

Length, 1 ft. 1½ in. Width, 3 ft. 3⅞ in.

PLATE 57 EMPEROR GODAIGO'S MESSAGE

Length, 1 ft. 1½ in. Width, 3 ft. 2½ in.

These are selected out of the documents of the Saidaiji temple dating from its restoration to the Ôyei (1394–1427) and Yeikyô (1429–1440) eras, and now bound in two volumes. The first is the copy of a notification issued by the Dajôkan or by the Cabinet in 1303 in connection with the above-mentioned lawsuit against the Akishinodera regarding the ownership of Akishinoyama otherwise called Inuiyama, an area covering a thousand *chô*. The second is the transcript of a decree issued by the Sabenkan's office in 1249. In those days extraordinary appearances of the heaven and earth manifested themselves precisely as were predicted by an official soothsayer. To ward off further calamities, the Imperial Court caused religious services to be celebrated over the land, bidding temples of Kyôto, Nara and other places read the Konkômyô-Saishôô-Kyô; and the Yenryakuji and Onjôji temples, the Daihannya-Kyô, for a week at a stretch. This decree to the Saidaiji is also to the same effect. The last of these three documents refers to the litigation about Akishinoyama already described, commanding the temple to enforce strict control of the land and not to allow minor officials to make its free use. The message was given to Priest Kenshô and was delivered by Fujiwara-Munefusa to Jôkaku, who was a disciple of Kôshô-Bosatsu and succeeded to Jishin as Abbot of the Saidaiji of the third generation in 1316 and continued so till his death in 1325.

PLATES 58–59 KÔSHÔ'S AUTOGRAPH "KEKKA-HYÔHAKU"

In India ink on paper. Size of page, 6 in. × 4⅞ in.

The autograph bound as a folder describes Kôshô's own religious austerities practised during summer. It was written in 1251 and 1262. Altogether it consists of seventeen written pages, of which six are found on the reverse side of the sheet. Here are reproduced the first and last pages.

PLATE 60 HONDEN (ORATORY) OF HACHIMAN SHRINE

The tutelary Hachiman shrine of the Saidaiji stands among hills about a mile to the west of the temple. Its history is unknown. The architectual style and execution show that it belongs to the mid-Muromachi period (the fifteenth century). Details in a large proportion give the work, though it is a small building, a very dignified expression.

The Kairyûôji Temple

The Kairyûôji temple stands in Hokkejimachi, Nara. Being in the neighbourhood of the former site of the Imperial Palace, it is popularly called the Wakidera; or the Sumidera, as it is situated near the north-eastern corner of the palace-grounds. The temple was founded by the Empress Komyô with the sanction of the Emperor Shômu and enshrined the Eleven-Headed Kwannon carved by the Empress as its principal image for worship. Primarily her father Fubito's residence was used for the purpose of praying for the peace of her parents' spirits. But in 731 the construction work was commenced; the Kondô, East and West Kondô, Kôdô, Kyôzô, Shôrô, Priests' Apartments, and Refectory were duly constructed, the whole covering an area of twelve *chô*. In 716 when Priest Gembô was about to leave for China for the prosecution of his studies the Empess had a special religious service held to pray for his happy voyage. On his return in 735 she caused Buddhist images and sutras brought over by the priest to be kept in this temple and appointed him its chief Abbot. Hence the monastery was called by the present name Kairyûôji (the Temple of the Dragon Sea-King). Gradually its fortunes declined, until in the Kannin and Shôô eras (1017–1292) Priest Yeison of the Saidaiji and Priest Kaiye of this temple regained its former prosperity, turning it into an institution of the Kairitsu sect, and carried on an extensive reconstruction. Subsequently its star was again on the wane. During the Keichô era Iyeyasu made a donation of land annually yielding a hundred *koku* of rice. But at the beginning of the eighteenth century no other building was left except the Kondô, East and West Kondô, Gomadô and Kyôzô. Now we have the Hondô, West Kondô, Kyôzô, but nothing else. There is no priest belonging to the temple, which continued to be under the charge of the Saidaiji since Priest Yeison's times.

PLATE 61 TABLET OF KAIRYÛÔJI

Wooden. Height, 2 ft. 2⅞ in. Width, 1 ft. 1⅞ in.

Tradition ascribes the handwriting to the Emperor Shômu. The style, although like that of Nara in the main, has lost its grip; weaker in brushwork, loose in the combination of strokes and somewhat cramped in the arrangement of characters. When we compare its carving with that of similar Nara tablets preserved in the Tôdaiji and Tôshôdaiji temples, we find some divergence in technique inspite of general coincidence: the incision is not so steep and deep as in the latter specimens and strokes are thicker; besides, when strokes cross, they are not placed one upon the other as in them. Taking all this into consideration, we may well presume that it is the restoration of the original Nara work during the revival of the temple.

PLATES 62–63 THE EAST GATE

The present Kairûôji deprived of the other three gates has this East Gate as its only portal. It is of an ordinary *shikyakumon* type common from the Kamakura period. The treatment of ornamental features on sides being not so much vigorous as delicate shows that the building dates from the latter days of the Ashikaga epoch. Thus it is a rather late specimen of *shikyakumon*, but is typical of the age and fairly well preserved.

PLATE 64 THE HONDÔ

Going through the East Gate, we see to our right this Hondô facing to the south. The date is unknown, but its style points to the Tokugawa period.

PLATES 65–67 THE SAIKONDÔ

The Saikondô, which enshrines the image of Yakushi, is believed to date from 731 and, if so, is the only structure surviving from the time of the foundation of the temple. The architectural style corroborates the tradition, but the building underwent a complete restoration during the Kamakura period, when the temple was resuscitated. Its structure is mainly of the Tempyô date, but much of its details is altered —some columns substituted, upper braces (*zunuki*) with their ends moulded in the *Tenjikuyô* manner, which is a characteristic Kamakura peculiarity, and similar new features are to be seen in such members

as the *kōryō*, *hijiki* and *masu* as well as in the curve of the roof ridge. Whereas the powerful profile of *kōryō*, the gentle curve of the *hijiki* and the height of the *masu* are all indicative of the Tempyō style. The contrast presented by new and old features, excites our great interest. Of all Tempyō buildings this is on the smallest scale. It is like a *hakkyakumon* portal rather than a hall. With all its alterations, we must congratulate ourselves that it has survived to this day.

PLATE 68–69 THE KŌDŌ

We see this building to the left of the main approach in a left hand corner facing to the west. Though it is called by the name of Kōdō and shelters the image of Monju, it was originally the Kyōzō (Library of Sacred Books). The first Kyōzō of this temple, which was built to house a comple collection of the Buddhist scriptures brought from China by Priest Gembō, must have been built in the style of an *azekura* (a granary with triangular timbers laid lengthwise and crossed at the corners), but it is unknown when it was lost. The present structure seems to date from the mid-Kamakura period and so must have been among those which were reconstructed by Kōshō and Kaiye during the revival of the temple. It makes the use of a characteristically Kamakura *mitsuto* bracket with its *hijiki* trimmed with the *sasaguri* moulding and finished off in the *Karayō* manner, that is to say with both ends shaped into an arc. On the other hand the end of the *zunuki* or upper brace is carved in the *Tenjikuyō* style. Such a composite style was first seen in the Bell Tower of the Tōdaiji temple erected about the Yen-ō era (1239). Some resemblance between the two buildings makes us think that their dates were not far apart. We may regard this Kōdō one of the earliest specimens of the merger of two styles *Tenjikuyō* and *Karayō*. The simple and forcible structure by means of the *kōryō* and *gasshō* was handed down from the Nara age, but here in this small building it makes a perfect harmony. The *kōhai* or appendice in front presumably dates from the Kamakura times, but was not original.

PLATE 70 FIVE-STORIED PAGODA

Wooden. Height, 13 ft. 2½ in.

Traditionally this is called the model of the five-storied pagoda of the Saidaiji temple. But its date is older than that of the foundation of the temple. Nor is it a model in a proper sense, having no central pillar and brackets. In all likelihood it was intended as a *sharitō* to contain Shaka's relics and was installed in the interior of the temple. As a matter of fact, this preserved *shari* relics and used to be kept until recent years in the Saikondō as the chief object of worship by Kōshō-Bosatsu and his followers, who turned the temple into that of the *Ritsu* sect. This makes us think that it was essentially designed as a *sharitō* in the Nara times too. The entasis of pillars in every storey shows that it was produced before the Nara period, but its composite brackets in the *mitesaki* type date it later than the Pagoda of the Hōryūji temple and the presence of the *kotenjō* ceiling and the absence of the *shirin* frieze prove it earlier in date than the Kondō of the Tōshōdaiji, the Pagodas of the Taemaji temple and the Sangwatsudō Hall, all these buildings being provided with the *kotenjō* and *shirin*. In these respects the present work coincides with the Pagoda of the Yukushiji temple and is characterized with the earlier Nara style. There is only one more piece of the same pattern, the smaller pagoda of the Gokurakuin temple, all three making very precious architectural treasures. In this Pagoda of the Kairyūōji is preserved a sutra case labelled with the date of 1284. Another inscription of the repair of 1297 is found inside the square stand of the Pagoda. Both the dates belong to the period of the revival of the temple.

PLATE 71 SHARITŌ

Gilt bronze. Height, 1 ft. 1½ in.

Instances of a *sharitō* made of a crystal globe containing Shaka's relics and placed on an artistic stand were illustrated from the collection of the Saidaiji temple. The present specimen is another such of the Kamakura date. It is noteworthy that all these belong to temples in close connection with

Priest Kōshō, a fact testifying to his deep reverence paid to Shaka's relics. On the underside of the pedestal this work has an inscription of 1290, just two years before the consecration ceremony held in honour of Priest Kaiye's reconstruction of this temple. It is a choice specimen of the exquisite metalwork in the Kamakura period, with an elaborate flame-ornament, a very carefully worked-out pedestal and a lion ornament frequently seen in Kamakura pieces.

The Futaiji Temple

The Futaiji or Futaiten-Hōrinji temple stands in Hōrenmachi, Nara. The Emperor Heijō, who abdicated the throne in favour of the Emperor Saga in 809 and came to live in Nara, later attempted to ascend it again without success. He then moved to the present site of the Futaiji and died in 824. His son Prince Abo continued to live there and after him his fifth son Ariwara-no-Narihira, who turned it into a temple in 847 in accordance with the Imperial decree, consecrating as the principal image the statue of Kwannon made by himself. The temple experienced vicissitudes of fortune during its long history of more than eighteen centuries, now a solitary phane in a very deserted place, with dilapidated buildings. At present it is a branch temple of the Saidaiji monastery.

PLATES 72–73 THE SOUTH GATE

The date of this gate is unknown, but is attributed to the later Kamakura epoch. An interesting feature of this *shikyakumon* is the use of the *oikake* designed very beautifully together with the *hanahijiki* on it. Such an arrangement is to be seen in later *shikyakumon* gates, but very rarely in those of the Kamakura or prior dates, the present specimen probably being among the earliest examples.

PLATE 74 THE HONDŌ

Width, 43 ft. 9 in. Depth, 31 ft. 7½ in.

The date of construction is not recorded. The use of the *kōryō* in place of the *zunuki* to be seen in the central compartment is unknown in the Kamakura, but frequent in the Ashikaga period——perhaps one of the earliest instances of the feature. The slope of the roof is indicative of its gradual change to the steeper from the Kamakura to the Ashikaga period. There are also some *Tenjikuyō* details in this building. So the temple may be considered to be of the transitional pattern from the Kamakura to the Ashikaga style. Herein is enshrined the statue of Kwannon traditionally ascribed to the hand of Ariwara-no-Narihira.

PLATE 75 KWANNON (HONDÔ)

Standing statue. Wooden and coloured. Height, 6 ft. 3½ in.

Being a work of the earlier Heian period, it is made of a single block. The carving is shallow and soft. As is usual with single-blocked statues, it exhibits little variey in modelling between the upper and lower parts. Because of the tall and slender proportion we find something dull and insipid in the treatment of long flowing scarves and banderoles. This shows that the date of authorship is very near the Fujiwara epoch. The disposition of arms worked out with simplicity adds to a certain effect of nobility. The colouring is by the later hand. So are the fingers, part of the headdress, scarves flowing down from the arms, the lotus-flower and the stand. The nimbus belonged to another piece. Probably it is the work dating from the time of the erection of this temple.

PLATES 76–80 GODAIMYÔÔ

Seated statues. Wooden and coloured.

PLATE 76 FUDÔ-MYÔÔ

Height, 2 ft. 8½ in.

PLATE 77 GÔZANZE-MYÔÔ

Height, 5 ft. 1 in.

PLATE 78 DIAITOKU-MYÔÔ

Height, 4 ft. 9½ in.

PLATE 79 KONGÔYASHA-MYÔÔ

Height, 4 ft. 11½ in.

PLATE 80 GUNDARIYASHA-MYÔÔ

Height, 5 ft. 2 in.

These five works each composed of a number of wooden blocks and enriched with colours are probably by the same hand. They have a rounded frame, small eyes and nose, and a posture and expression calm and tranquil unlike ordinary Godaison pieces. Fudô, with less prominent locks of hair, is remarkable for noble composure, with his hands and arms raised to hold his attributes and with his crossed legs. The execution of his drapery is realistic. The use of crystals for eye-balls in this work alone seems to tell that it was restored by the later hand. Gôzanze, Kongôyasha, Gundari are nearly of the same type. Instead of the usual menacing gestures they are here shown in a placid posture standing straight with a slight bend in knees and waist and skirts playing just a little about the knees; hence they seem to present but little of their Shingon mysticism. Daiitoku with six heads and six legs does not easily lend itself to a plastic represention but here in this work its complicated posture is successfully rendered in a realistic manner. We remark in this Godaison group a great deal of Fujiwara-like tenderness and serenity and at the same time many elements of realistic treatment. This inclines us to date these pieces to the latter days of the Fujiwara age near the beginning of the Kamakura times. Statues of Godaison in a comple set are very rare, especially such a group of excellent workmanship.

PLATES 81–83 TAHÔTÔ PAGODA

The pagoda stands in a south-eastern corner of the temple. Primarily it was an ordinary two-storied *tahôtô* pagoda, but the upper part having gone into decay it was altered into the present form surmounted with the *hôgyô* roof. Time has dealt no more mercifully with the lower story and it is now in utter dilapidation with the roof battered in and the verandah rotten down to show the *kamebara* underneath. The architectual style is that of the native *Wayô* school in the Kamakura period. The building is a small delightful work. The ceiling is beautifully executed in the delicate *Wayô* technique with graceful floral ornaments in full colours adorning the space of the coved *kogumi* ceiling and *shirin* frieze. The decoration is contemporary with the erection of the pagoda. The *nageshi* and *hêdate* are enriched with coloured designs and door-panels with the picture of the Eight Patriarchs of the Shingon Sect, but they are all by the later hand.

The Gakuanji Temple

The Gakuanji temple is in the village of Hirabata, Ikoma-gôri, Nara. It has its origin in a cloister established by Prince Shôtoku at Kumagorimura. Falling ill before it was finished, he asked the Empress Suiko to enlarge it into a large temple and entrusted the work with the Prince Tamura. After his accession to the throne as the Emperor Jomyô, Prince Tamura carried out the intention of Prince Shôtoku and established the Kudara-Daiji on the banks of the River Kudara. Later it became the Daikan-Daiji in Takechigôri, and the Daianji at Nara. On the original site of Kumagori was also established the Kumagoriji otherwise called the Gakuanji. In the Tempyô era Priest Dôji, a native of the village, was its chief Abbot. Yoritomo is known to have repaired the temple in 1186. Priest Yeison and his followers Ninshô, Shinkû, Jishin and others came to the temple to revive its fortunes. Subsequently the temple enjoyed the the patronage of the Emperors Gouda and Godaigo. During the Yeishô era (1504–1520) the Kondô and Gomadô were burnt down by Hosokawa-Ranzôken's soldiers. Again in 1568 Matsunaga-Danjô set fire to the Gakuanji leaving nothing behind but the Kôdô and the Five-Storied Pagoda. Hideyoshi removed the Daitô Pagoda to the Shitennôji at Ôsaka. His son Hideyori repaired what was left behind. Nothihg, however, occurred to retrieve its fortunes. Now there are the Hondô and priests' living quarters, but nothing else. It is at present a branch temple of the Saidaiji. The chief image here enshrined is the statue of Eleven-Headed Kwannon.

PLATE 84 KOKUZÔ-BOSATSU

Seated statue. Lacquered and coloured. Height, 1 ft. 8½ in.

This was originally installed as the principal image of the Kokûzô Hall. According to the inscription in India ink found on a part of the pedestal it belonged to Priest Dôji and served as the main object of worship in the Gumonji service he learnt from Zemmui-Sanzô during his stay in China. Further it is revealed that in 1282 it was newly coloured by Meichô and was adorned with the newly made diadem, nimbus and attribute by Zenshun and the completion of the reparation was celebrated with a religious service by Kôshô-Bosatsu. The work, though a small piece, is a lacquered statue peculiar to the Nara period, remarkable for T'ang-like tenderness in facial expression and drapery and for perfect proportion. Its pedestal is very well preserved inspite of some repairs by the later hand. As the inscription shows, the nimbus dates from the end of the thirteenth century. But it is unascertainable whether it preserved the original type or not. Seeing that it consists of a large disc unusual in the Nara period and having something of the Shingon-like mysticism, it does not probably reproduce the original pattern.

PLATE 85 MONJU-BOSATSU

Seated statue. Wooden and coloured. Height, 1 ft. 4½ in.

It is a single-blocked statue of the later Fujiwara period. The lion is to be ascribed to the same hand. The carving is very simply executed. The juvenile expression is characteristic of the taste in the latter days of Fujiwara times. It may be considered to represent the transitional stage to the portrayal of the deity as the so-called "Child Monzu" with five locks of hair. The work is a very interesting and delightful piece.

PLATE 86 PLAN OF FARM OF KUMAGORI-SHÔJA

In India ink on hemp cloth. Size, 3 ft. 7 in. 2 ft. 3 in.

This plan drawn in India ink with a touch of vermillion for buildings is a unique piece showing the farm of the temple and probably dates from the Nara period. It is to be treasured with the Plan of the Tôdaiji temple now incorporated in the Shôsôin Repository.

The Hôzanji Temple

The Hôzanji temple is in Ikomamachi, Nara prefecture. According to tradition it was established by Yen-no-Gyôja, but its history down to the modern times is unknown. During the Yempô era (1673–1680) Priest Tankai came to practise religious austerities in the Cave where Yen-no-Gyôja is said to have lived and founded this temple in 1678. Besides the Hondô it has the Kangitendô, Yen-no-Gyôjadô and other buildings. Kangiten in this temple commands very popular worship. Temple treasures mostly came into its possession since Tankai's times.

PLATES 87–90 MIROKU-BOSATSU

In colours on silk. Height, 4 ft. 9½ in.
Width, 2 ft. 11 in.

The deity is represented in the ordinary type of Nara and earlier Heian works with its left hand holding a lotus-flower surmounted with a pagoda and the right hand opened and hung down. It sits under a canopy and upon a pedestal turning slightly sideways towards the direction of the hand held out and emphasizing the idea of the hand symbol, which here means the acceptation of a prayer. Very long banderoles gently hanging down from the diadem to the pedestal make swirls and undulations and seem to combine the bodhisattva and the seat into a perfect whole also adding to the effect of tranquility and benignity of the expression. The drapery flowing down and hanging on the pedestal serves for the same purpose. The drawing of the god is done in gentle and fluent hair-lines in vermillion. The noble disposition of rich and soft arms is replete with T'ang-like effect reminding one of the frescoe of the Hôryûji temple, especially a bodhisattva on the eastern wall on the south side. Both the mandorla and the pedestal are large in proportion. Generally speaking the accessory parts are summarily rendered in an old technique, and no ornamental design is seen on the drapery and very little on the dais. Compared with standard Fujiwara paintings such as the Eleven-Headed Kwannon in Baron Masuda's collection, Fugen owned by the Imperial Museum of Tôkyô and Nirvana belonging to the Kôyasan Monastery, it is remarkable for powerful elements peculiar to Kamakura in the diadem, flowing robes, and the petals and decorations of the pedestal. All this makes us believe that it was copied from an old model during the later Fujiwara or the earlier Kamakura period.

昭和八年一月二十一日印刷
昭和八年一月二十五日發行

南都十大寺大鏡第二十三輯
西大寺大鏡第一冊

東京市下谷區上野公園内
編輯者　東京美術學校

東京市本郷區金助町四十五番地
發行兼印刷者　大塚稔

東京市本郷區金助町四十五番地
印刷所　大塚巧藝社

東京市本郷區金助町四十五番地
發行所　大塚巧藝社
電話小石川三六〇八番
振替東京二二七七二番

不許複製

E708
N48
(23)

終